5861
2144
v.1
no.1

CAHIERS iDEALISTES DES JEUNES

種蒔く人

大正十年二月二十一日印刷
大正十年二月二十五日發行

第一巻第一號

自分は農夫のなかの農夫だ。
自分の綱領は勞働である。
——ミレー——

第一號

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生存競爭と相互扶助論

赤帽子

チヤアレス・ダアキンの進化論程、近代文明上に、大なる影響を與へたものは少いであらう。實に近代の科學に其の土臺を與へたものはダアキンである。ダアキンが其の名著『種の起原』一度公にして以來、進化論は一切の科學及、哲學の根抵となつた。其の進化論の論據であると云はる丶『生存競爭適者生存』と云ふ概念的法則は、近代文明の總ゆる問題に解決を與へる合鍵のやうになつてゐる。如何なる社會科學及自然科學を論斷するにも、この生存競爭と云ふ術語程、廣く用へらる丶言葉はないであらう。然して此の生存競爭と云ふことは如何なることであるか、是れを從來の學者の解釋に從へば、即ち次の如くである。

『最も弱きもの、最も愚かなるものは死滅し、最も兇暴なるもの、最も慓悍なるもの、即ち周圍の境遇と對抗するに最も適したるものが生き殘つて益々繁榮する。優者强者は愈盛で、劣者弱者の亡びるは自然である』

と、而してこの解釋を、人類の日常生活にまで當てはめて、隣人を賣つて自ら好い地位を得るのも、節を屈して富を造るのも、他人を殺して自らを生かすのも、悉くこの生存競爭と云ふ一ツの言葉に約められるやうになつた。而して、彼等此の生存競爭と云ふことを妄信してゐる者は、現今の社會組織の基礎たる、資本の私有及其の結果たる貧富の懸隔の甚だしきことなどは、無條件に承認して、何等其所に不思議を置かないのである。其れのみならず、甚だしきものに至つては、戰爭を以つて、人類の生存競爭の一現象である。戰爭は人類進化の一大條件である。大いに戰ふべし。など丶戰爭を讃美するものすら出て來るに至つたのである。然しながら、此の解釋での生存競爭と云ふことが、果して生物界若くは、人類界の全事實であり、自然であり、眞理であり、又其れが進化の全要素であるだらうか、而してダアキンは、此の生存競爭と云ふ事實のみを說いて他を說かなか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたであらうか。
　ダアキンの『種の起原』中の一文を引例せば。『適者とは、決つして体力の最も强健なるもの、若くは性情の最も狡猾なるものではなく、只社會全体の幸福の爲めに强者も弱者も一致協力して、相依り相扶ける道を知つてゐる種族である』。と、是れを以て見ればダアキンも、同種族間の協同及相互扶助と云ふことが、種族保存上、重大なる事實であることを充分に認めてゐることが明瞭である。

　元來ダアキンの進化論には、廣狹の二意義がある。是を狹義に解せば、ダアキンが至る所に説いてゐるやうに、生物個々の爭鬪即ち生存競爭と云ふことになるが、是れを廣義に解せば、必ずしも生物が食物を求むる爲めの、個々の爭鬪のみでなく互に相依り相扶け、一致協同以て外敵にあたることが、種族繁榮の一大條件であると云ふことになるのである。然るにダアキン以後の一般科學者思想家、甚だしきに至つては專門の進化論者までも是れを狹義にのみ解して生物個々の殘忍なる生存競爭と云ふ一面の法則のみを主張し、別に相互扶助と云ふ重要なる法則のあることを忘れ又この法則が少なく共生物にとつては、生存競爭と云ふ法則よりも尚一層重大なる事を看過して、人類社會を論ずるにあたつても、生存競爭と云ふことのみを當てはめて論斷するが爲めに、益々狹義に傾き終には人類社會までも血に飢ゑた餓鬼共の寄集つた修羅場の如く推意し、賤劣な利已主義が、科學的神聖を受ける樣な傾向になつたのである。

　然らば從來の學者の總てが此の誤謬に陷つてゐるかと云ひば、決つしてそうは云ひないのである私が云ふまでもなく、クロポトキンの相互扶助論は、此の誤信者に一大鐵鞭を下したのである。又クロポトキンの先驅をなしたる者にハクスレーがある。然しながら、今此處の僅かな紙數に限られた一小文を以つてしては、相互扶助論者諸氏の主張を一々例示して、生物界に於ても、人類界に於ても、一致協同相互扶助と云ふことの如何に重大なる一條件であるかを徹底的に論評する譯けにはゆかないが、一部の學者間にあつては、此のハク

東167801

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

スレーやクロポトキンの相互扶助論も、之を要するに、ダアキンの進化論に附言したものに過ぎないとまで云はれてゐる。

一般生物界の原則を直ちに人類界に應用することの當否は、此處には云はない。其は兎も角も、吾々人類社會に於て宗敎及道德の敎ふる處は何んであるか、否寧ろ其の存在の所以は何所にあるか法律の存在する所以は何んであるか、煎じつめて云へば、何れも人類の社會的生活上爭鬪を避けんが爲め、若くは萬人の幸福を望む以外に其の目的はないのである。然しながら、吾々人類間の、他人が溺れんとするを見て自らの死をも顧みず、河に飛び込むとか、他人の家の火事を見て自らの危害を被るをも思考せずして驅け込むとか、と云ふ小事實は、單なる宗敎道德の敎ゆる博愛とか、同情とかと云ふものからではない。もつと〳〵偉大な人間性の根本的な或る感情の發動である。即ち他人の救ひを求むるさけび聲を聞いては默つてゐられないと云ふ一本能からである。此の本能こそ生物進化若くは、種の永存上の重大なる原則なのである。

現代に於て吾々人類が、諸生物の靈長とまで進化したるは何にが爲めであるか、勿論知識の働きであるかも知れない。然しながら原始時代の人間も矢張現代人の如き進步したる知識を有して居つたかと云ふことは、想像すらなし得ないことである。然らば何が故であるかと云ひば、人類社會に於ては協同一致相互扶助と云ふことが、他動物よりもより多く實現されたからであると斷ぜざるを得ないのである。宗敎德道に於て愛とか同情とか正義とかを說くのも、要する所人類進化の一大法則たる『相互扶助萬人の幸福』と云ふことを、擁護し若くは育まんが爲めである。然るに現代の社會組織を見るに果して此の萬人の幸福を望むに適してゐるか、現代の貧富の甚しい懸隔は何物が生んだのであるか、此の貧富の大なる差隔が萬人の幸福であるか、吾々人間たるもの自由に冷靜に考へねばならない。そして吾々人間萬人の爲めの道を見出ださねばならない。吾々はれ互に此の道に就いて研究しよう。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無産者と有産者

金中生

現代社會には掠奪する階級と掠奪される階級との全く利害を異にしてゐる二つの階級が對立してゐる。資本家地主は前の階級に、勞働者農民等は後の階級に入るものだ。

掠奪階級は有産者の階級で、被掠奪階級は無産者の階級である。有産者は有産者であるから掠奪し、掠奪するからその財産を益々殖やすのだ、一方勞働者達は無産者であるから掠奪され、掠奪されるから、いつになつても無産者の地位から浮び出る事が出來ない。近代の無産者は親も子も、子々孫々までも無産者であるのはこれが爲だ。事實有産者は無産者を掠奪するより外にその財産を殖やす方法は全然ない。働くものが富まず、富んだものは働かないのが、吾々の日常に見る所である有産者階級は働もせずに無産者から掠奪する　　である。やゝもすれば彼等はブルジョア學者の口まねをして『凡て生産には資本と土地がその要素の一部を占めてゐるが故に資本家地主が生産物の分配に與かるのは當然だ』と言ふ。如何にも資本や土地は生産の要素であらう。然し資本家や地主が生産者の分け前に與かれるとどうして云へる、彼等は資本と資本家とをごつちやにして吾々を誤魔化さうとする。彼等は生産する所なくその分け前だけは人並以上にとらうとする社會の寄生蟲だ。

現代を謳歌するものは掠奪階級の人々である。彼等は他人を虐げ　　事を恥ともせず、その上それを大きな特權と考へてゐる方々であるから、この御代を謳歌するのは當然だ。『有産者と無産者との關係は、丁度華やかに飾つた馬車に傲然と構へてゐる脂肪肥りの男を數百人の人が鞭れながら、うめきながら引つぱつてゐる樣なものだ』と或る人が云つてゐる。乘つた男は降りたくなからう。

有産階級は又權力階級である、　　から學校にいたるまでその手に收めてゐる。そして自分達の地位を發展させ或は堅固にする爲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めに如何に惡辣にそれを利用したか。國を富ますと云つて勞働者の人格も獨立も健康をも顧みなかつた、而して富んだものは國でなくて彼等であつた、勞銀で自分の土藏をこしらへた勞働者は一体あるだらうか、彼等がもうけるに從つて勞働者の財布は輕くなつた事があつても。有產者階級は又國家の名によつて外國の有產者と戰ひ無數の勞働者を大砲の前にさらして罪とも考へなかつた、彼等は社會の健全なる發達の前に普通選擧を拒んだ平民內閣と云ふのは無爵の原敬が組織した內閣の意味だ。若しくは無爵の有產階級の政黨が組織した內閣を云ふのだ。反對黨の憲政會も國民黨も同じ穴の貉だ、如何に彼等同志が爭論した所でそれは有產者たる彼等の立場からするに過ぎない。更に彼等は國家の安寧秩序の名の下に學者の貴重なる研究を妨げる、それで學者的良心を持ち合せないものだけが學者として榮ゐてゐる。一体彼等のさす國家社會とは何のことだらう。彼等自身の國家社會以外に意味はあらうか。國家とは有產者か無產者を壓迫する機關であると公言するのも尤もと思はねばならない。

彼等は凡ての敎育機關を持つてゐる。而して小學校から大學までどこでも有產者的敎育を授けて有產者的根性を幼い者や若い者に叩き込む。眞理と正義とに覺めた敎育家はすべて危險思想家として壓迫される、殘る敎育家は墮落した有產者的根性を持つものか、憶病者かに過ぎない。こんな敎育家から敎育された生徒は、しらず〳〵の中に有產者的根性を持つてしまふ。その上有產者は自分達の無數の新聞雜誌によつて社會に有產的者プロパガンダをする、社會連帶、社會奉仕、成功、立身その外凡ゆる題目を求めて、無考な無產者に有產者的根性を持たせやうとする。しかし自覺した無產者はそんな事に迷はせられない、反無產者的思想が盛になればなるにつれて、その心はいよ〳〵燃ゐてくる。無自覺な無產者はよく有產者的思想家の詭辯にのせられて味方を賣る樣な事をしてしまふ。政府或はその他の有產者の團体は到る處種々な團体を設けて彼等の地位擁護の手段とする。無考な人々は敵の城を築いて覺らないでゐる。彼等

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の所謂『穏健な思想』『健全な思想』は彼等にとつてだけの話だ、無産者にこれ程危険な思想はない、無考な人は穏健と健全の名前に瞞まされてしまふからだ、凡て或る時代に最も勢力のある思想は權力階級の思想である事を忘れてはならない。

吾々は有産者の蹂躙から脱しなければならないそして各人の自由な發達が、凡てのもの丶自由な發達の要素になる樣な社會狀態を見ねばならない然し資本家は夫れを欲しない、彼等は力をもつて我々の希望と努力とを壓し去らうとする。我々も力を持たねばならない。そして我々の力は只自覺せる無産者の團結からばかり生まれるのだ(了)

(一九二〇、一二、一六)

なにがなし滊車に乗りたくなりしのみ
　滊車お下りしに行くところなし。
どんよりとくもれる空を見て居しに
　人を殺したくなりにけるかな。

石川啄木

戦争に行くなら行つて見ろ

マルセル・マルチネ

——斷片——

貧しき者よ、勞働者よ、農民よ、
お前等の重い　黒い手を見ろ。
お前等の赤い　疲れきつた
視力の限りで、
お前等の娘どもを見ろ、
青ざめた　あの頬をよく見ろ。
お前等の　どもを見ろ、
瘠こけた　あの腕をよく見ろ
卑下された　あれらの心を見てやれ。
それからお前の　よぼよぼのつれ合だ、
廿歳代の相貌（カホ）と　いま較べて見ろがいゝ。
それからだ、あの憫れな肉体と、
恥辱を受けつゞけた　胸中と、
そら　お前の足下で
仲間　父　母ごちやまぜな
共同の墓穴（アナ）を
しつかり見るんだ。
さあ
戦争に行くなら行つて見ろ。

(呪ふ可き時代一九一六)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恩知らずの乞食

小牧

獨立せる一國が文明と稱する他の一國に隷屬する場合、謂ゆる愛國の熱狂者はその不合理を攻むるのみに止るものでない。その時はまさしく擧國一致の叫びだ、革命の火の手だ。

　自由なる一個人が少數の支配階級のために、物質的に、精神的に、凡ゆる屈辱を余儀なくせらるゝ場合、而かもそれが同國民同志である場合、良心ある人々の反抗は全身の忿怒となり易い。いづれにもせよ、支配者と被支配者との區別が現存する以上、そこに避く可からざる闘爭が發生する。

　第一の場合は民族の屈服であり、革命の叫びとして何人も之を認める。而して第二の場合は明かに人間の屈辱でありながら多くの人の叫びはない。

　社會が漸進に改造され得るものであると信ぜられる人々はブルジョアの　　若しくは　　ある。而して斯くの如き類の人々は社會主義者の仲間にも多く之を見出す。

　社會主義者と稱する人は今の社會にざらにある恐らく頭の先から足の先までブルジョアの化身であるカピタリストまで俺は社會主義者だと平氣で言へる世の中だ。これ等社會の寄生蟲は良心ある人々の敵であることを誰も知つてゐる。

　茲に看逃すことのならぬのは社會主義者と名乘り、改良の夢を貪るブルジョア・デモクラットの徒輩である。從つて社會主義者の眞價は單にその年功や、檢束の回數で評價さるゝものではない。先づその態度が常に鮮明でなければならぬ。而してその際主義者は不變的に　　でなければならぬ。思想が　　ある程眞理に近いからである。社會主義が一個人若しくは一團体の所有であるかの樣な生温い頭の人々があるとしたら、彼等は一種の影に過ぎない、已に時代の要求に錯誤してゐる亡靈に過ぎないのである。

　社會主義者の中には又、往々人間が人間の敵であると言ふ最も矛盾した事實を先づ解決せんとせ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずに、政府の利害關係に起因し、
魔法師の集合だ
た祭騷ぎに、うつかり浮かれ出
す反逆者がゐる。

彼等を愛國社會主義者と呼ぶ。この際彼等の理由はいつもきまつてゐる。同民族存亡のために、支配階級存亡のためと言はずに國家のために戰ふのだと熱狂する。彼等には同民族に屈辱されやうがその國家がブルジョアであるとないと、そんなことは到つて無頓着だ。而してそれが又支配階級企業家、財閥、軍閥の擁護であることに無神經でゐる。

エホヴアの神宣はく、

收穫の時が來た。
汝等は　今日まで
俺たちの　功德で
生きて來たのだ。
俺たち　在る故に
國家が在る。
汝等は　俺たちの
國家のために
失せろ…
どつこい　俺たちは
これからが
もう　ひと　利得(モーケ)だ。
俺たちの　富は
國家の富だ。

かくて數知れぬ犧牲者、或者は肉体的に又或者は精神的にすべてを、手品師の魔力に惑されて、呪ふ可き偶像の前に捧ぐ。

明かに、生き殘る
數百萬の妻、子、父母、兄弟、愛人、友人の光明
希望の剝奪者であり、精神上の　である。

斯くの如き現實は支配階級と言ふ資本家の無政府主義が暴威を振へる間永續するもので、良心ある人々の無爲無能から子孫末代永劫に娑婆の責苦に遇はねばならぬのだ。それ許りではない、禍をともにする全世界の被支配階級の不決心と、不理解と　社會主義者の反逆から、　統御を望むこれ等惡魔の座輿のために、世界の被支配階級の味方同士、兄弟同士か　はねばならぬのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

この戰慄す可き恐怖の一幕は一九一四年の世界大戰に於て演出されたのである。交戰諸國の社會主義者、勞働者の假面は剝れ、國防のために、クルップ兵器工場はクルゾー兵器工場と鎬をけづり社會主義者は宗教家と抱き合つた。當時社會主義の破産を唱へし人々は、この爭はれぬ事實を指摘してゐる。

何人も第二インターナショナルは明かに醜態を暴露したことを否まれない。しかしそれを以て社會主義の破産とばかり信ぜられない。第二インターナショナルは當然歸着す可き點に歸着したのである。第二インターナショナルの多くはマルクスの科學主義に影響を受けしもの、遂に一八四八年の空想社會主義者に過ぎなかつたので、その結果行詰つたのである。

こゝに、殆んど絶望に近い人々の上に第三インターナショナルが出現した。良心ある人々は遂に互に見出したのである。今やその思想は世界の全土に擴がらうとしてゐる。而してその　標識である。それ故凡ゆるた座敷社會主義者、日和見社會主義者、　主義者約言すれば凡べての第二インターナショナル奉仕者は道伴れ出來ぬ敵と知らねばならぬ。

眼を開いて眞理を見、恐れなく進む勇者には種々の悲しい事實がある。權力と無智に盲從する社會數千萬の受難者は教育、宗教、新聞と言ふブルジョアの何心なき宣傳に魅せられ、眞理を高唱する人々を以て盡く不道德極まる現代社會の公敵と見做す、故に、當分この苦痛を忍ばねばならぬことは、最も悲しい現象の一つである。然しこれ等良心ある人々の同士は一國に限られてゐない。而してこれ等被迫害者の行動の一つ一つはやがて世界的新社會の到來に及ばす力だと思ふと氣强い。レーニンは一九一六年端西社會黨の戰爭に對する態度に就いて書いた。『同志よ、　敵國民ではない』頻死に迫つた社會の剝奪者、無産者の　は最後に、絶望的に叫んだ。『汝、人民、國家の敵、亡國論者、恩知らずの乞食』。（二〇・一二・一八）

貧乏人の涙

M　生

電車の響きが一しきり近づいて、又遠くへ、遠くへ消えて了つた。自働車のウナりも此夜更けにはそんなに耳障りにもならない。僕は先刻からふとした事でSの事を思ひつゞけて居る。ペン持つ手にさへ師走の夜氣がしん〳〵と泌みて來る此寒空の下でSは何處の街をうろついてるのか、どこの果てで眠つてるのか。Sが行方不明になつてからもう久しくなる。あんなに善良で親切だつたSが久し振りで偶然京都で遇つた時にはもう救ひ難い男になつて居た。『僕が惡いんぢやない、社會が惡いんです』といつて淋しく笑つたSの顔がまだ目につく。此まゝの社會組織ではあらゆる人が金を奪り度いのはあたりまへだ、Sの樣な善良の持主が金持ちの息子だつたらきつと瞞されるし貧乏人の子だから劣敗者になるのが當然だ。それが人間生活の理想だらうか。安樂に暮して行く爲めには金持ちにならなければ出來ない。金持ちになるには段々惡企みがうまくならねばいけない。世の中は惡で固まつた金持ち丈けが生きて行く權利があるのか。駄目だ、駄目だ、此まゝの社會組織にして置かれるもんか。

『それが時勢だ、斯ういふ世の中だもの仕方がない』といふ人がある。馬鹿！

あゝSがどんなに變つたからとてそれはあの正直だつたSの個性の發展ではない。Sを偲ふにつけ古いSの手紙を見たくなつた。一寸空を覗いたら寒天に小さく星が戰慄して居た。

手紙の一

Mさん！私は今又、就職口がなくつて困つて居ます。だからといつて再びあなたに縋る勇氣が出ません。あなたとて現在お困りの事はよく知つて居ますから………私は今友人の宿で世話になつて居ます。今日は夜業ださうで友人はまだ歸りません。其隙に此手紙を書いてるのです。新聞配達の口でもと思つて探して居ますが母へはとても幾分も送れさうもありません。私は今になつて東京へ出て來てよかつたのか、國に居

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た方がよかつたのか解らなくなりました。それよりか今日はあなたへた約束の私の幼い還境の事を書きませう。私はあなたも御承知の北國のH湖畔の寒村で生れました。私の家は村を副ふて流れるB川の橋のもとにあります。今でも。家といひば家、小屋といひば小屋です昔は渡守りもした事はあるらしいんです。父親はH湖の漁師をし、母は魚賣りを渡世して居ました。少しばかりは村の親方(地主)の田を小作もしましたが、家は納屋もなし土庭もないので、それも思ふ樣に出來なく、いつまでも貧乏でした。實は私の上に二人の兄が居つたのです。私が物心ついた時には二人とも村のある親方の家に別々に下男に住み込んで居ました。夕方父が潟の漁から歸つて濡れた身体で舟から上つて來る頃には母はもう町の賣上げをよろこんでる頃でした二人の兄は夜分よく連れ立つて家へ遊びに來ました。親子五人爐邊で潟魚を燒いて食ふ時には何とも云ひぬ樂しいものでした。春も夏も秋も冬も、いつまでも〱も此樂しさがつゞくものと思つて居ました。

次兄は其頃十六七才でしたらう。夜分に來てはよく腹が空いたといつて滾して居ました。『なぜ親方のとこで腹一杯食はないんだ、今の若さで腹一杯食はないで一人前の仕事が出來るか』といつて父は怒鳴りました。然しそれは兄を憤つてるのでない事は皆にすぐ解つて居ました。『だつて家中の者が一緒に食んだから、一杯毎に食ふのを見てる樣な氣がしてならないんだもの』といつて次兄は來る毎に訴へて居ました。

次兄は他の家へ住み込みたいといつて父に迫りましたが、其頃は作男でもまだ年期といふ事になつて居ましたので適齢までの約束で動けなかつたのです。潟が荒れて漁に出なかつた或晩の事でした。親子がいつもの樣に集つても皆が憤つてる樣に默つて居ました。其夜に限つてランプがいやが上に暗い樣に思はれました。私は父の寢床の中で寢床といつても恥しい事に裸褸よりも藻草が多い位でした。父が今日漁に出られないので機嫌が悪いのだと思つて居まし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。

『あんな家は出た方がいゝ。詫びも糞もあるもんか畜生』と父は大きな震ひ聲でいつたので、他に何か事件が起つたのだとわかりました。『さういつたつてどこの親方さ行つても同じ事だ、俺があした詫び入れて半俵でも上げて貰ふから』こんな事をいつて長兄が父と次兄をなだめて居ました。『こつちが悪い事でもした事か。詫びる？馬鹿。俺が貧乏してるから馬鹿にしやがつて。奴だつて若い時にや俺と一緒に組子になつて潟に歩いたもんだ。今であんな身代になつた基はといつたら、ヘンだ。俺だつて稲盗人をしたら今時分あんな身代になつて居ら』といつて父は村の金持ちが一代か何代かで親方衆となるまでにはきつと隠れた悪い事があるとか偶然の好機があつたとかで、正直にたゞ働いた丈けでは何代も貧乏暮しから浮ぶ事が出來ないといつて、言ひ傳はつてる親方衆の隠事をいつて聽せました。『稼ぐに追ひ付く貧乏なしなんて眞赤な嘘だ』といつて居ました。

翌朝になると父だと思つて居たのが次兄でした次兄は其夜主人の家に歸らずに居ました。其日一日家で藁仕事をして居ました。私は初めて分りました。

次兄が一人前になつたといふので今迄年三俵の(三斗入)給料を四俵半に上げて呉れる樣に父が歎願に行つて聽入れなく遂々其主人と口論をしたさうです。それで次兄が逐ひ出される樣に連れて歸つたのです。然しそれが爲めに五俵の前借りが永久の借財になるのです。長兄がやつと詫入れて漸く半俵の上げ米で、次の日から又其家で働く事になりました。それから次兄は來る毎に主人の冷遇を訴へて居ました。

長兄は心棒強く無口な方でした。長兄の奉公してゐる家は村でも一二の親方でした。そこに長兄は五年も居りました。その家には私と同級の子供が居つたので、よく遊びに行きました。私達は立ち並んでゐる白い土藏の側でよく遊びました。秋になると米俵がいくつもの車に積まれて毎日その土藏に運び込まれました。私の家で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は一俵の米でも大騒ぎをするのに。其土藏の中には數へ限れぬ程の米が積まれてありました。私は其時分にはそれが羨しいとか不合理だとか不思議とかには思つて居ませんでした。たゞ羨しいのが其土藏の周圍に種々の果樹が植つて。夏にはすもゝ、あんず、秋には柿だの林檎が熟れて居て、今にも落ちて來さうでした。私はぽかんと見　れて居る事がありました。私はよく落ちたのや鳥に落されたのを貰ひはしたが子供乍らに厭な氣がされました。『親方の家へ行つたら物欲しさうにしてるものぢやないよ』と常々母からよく言ひ聞かされて居るので、そこの子供が何か食つてる時には成る可く避ける樣にして居ました。それでもその子の母親が子供の食ひ殘したらしい菓子を呉れる事がありました。私には皆珍しいものばかりでしたが、そんな時には何かしら泣き出したい樣な悲しさがこみ上げて來る氣がされました。私はそこの旦那を見るのが何より恐わかつたのです。なぜだか解りませんが。見られぬ樣に避けられる丈け避けて居ました。私達の遊んでゐるところへ出し拔けに來られると私は眞赤になつて身內が震ひて其子供にさへ話掛ける事が出來ませんでした。私が何かで叱られはしないかと恐しくて逃げ出した事さへありました。或時私に『こら！果物が欲しけりや欲しいといひばくれるから他人(ヒト)樣(サマ)のものへ手をかけるものぢやないぞ！』といひました。それから私は一層此人が恐わくつてなりませんでした。今から考へると父も母も兄も畏れて居たので私も恐く思つて居ました。いくつ貰つても行く每にやつぱり果物は欲しいと思ひました。旦那が見て居ないと思ふと梢の赤い奴に見惚れて居ました。

川波が耳障りになつて眠れない晩には煤けた小屋の天上を見つめてる事がよくありました。天上板代りの葭簾(ズ)も結んだ繩目も眞黑な煤煙(スス)がこびりついて今にも落ちて來さうでした。『誰れにも恐られずに自由に取られる果物の木が私の家にも一本欲しい』ものだと。寢る時には此一つの希望で滿され乍ら眠るのでした。或時先生が

『外國の村には道路の並木に果樹を植ゑて置くところがあつて、そこの子供達は其實が熟れるまでは誰も手をつけるものがない』と話した事があります。若し私の村にもそんな事になつたら、私もきつと熟れるのを待つて居ると思つた事がありました。飛んだ傍道へ外れて書き忘れましたが或日私は長兄等の寢る室を見た事があります。其中をあなたに見せたらい丶御參考になることゝ思ひます。

そこは馬屋の上の板の間で、板と板の間から昇つて來る馬尿の臭ひでむせる樣でした。

そこには長兄達五人の藁床が敷き詰められて居ました。銘々の藁床の後には新しい草鞋だの仕事着が繩に吊されてありました。小さい明り窓が二つあつて其下に石油箱が一つ置かれて、ローソクが一本立てかけてありました。古本が一二冊散らばつて居ました。歸りに見た此家の離座敷の椽に干してあつた奇麗な模樣の布團が、今でも目について なりません。此時ばかりは私も金持ちの子に生れたいと心から希ひました。

Mさん！これがほんの前たきですが今晩は余り遲くなつて疲れて來ましたから又後で。書きつゞけます。こんな風に子供の時に受けた環境の影響が、どれ程根強く今の私を支配してるか解りません。其時分に無意識に食ひ込んだ印象が今は意識した疑問となつて惱されて居ます。私は一生下男にはならないと念じたのが、他人の支配を受けずに生きて行く事が出來ません。地主が働かないで居ても田得米はちやんと倉の中に納まる若し其地主と私と假りに一時地位を替へたとしたら。其地主は明日から私より以上に食ふに困るだらうが、私の倉にはやつぱり米が入るでせう。若し私等が働かなかつたら。地主が働くかさもなかつたら一俵も米は上らないでせう。若し田地が誰れの所有でもなかつたら私等は働いた丈け米を持つ事が出來るでせう。私と同じ境遇の人だつたら必ず此事は考へてくれると思ひます。Mさん！私達は少くとも私は働かねば明日から生きてゆかれません。それがほんとでせうか。ではこれで……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

チエホフの『農人』から【一】

洋文

◆

チエホフは我々に向つて決して説教を試みなかつた、そして又彼は決して善と惡と截然と決定しなかつた、彼はたゞ我々の肩に農人の手の樣に骨たい、苦しみによごれた、大きな愛撫の手を置いた、そして彼の深い眼は我々に恁う囁く『人生は寂しい、苦しい、けれ共我々は決して絶望してはいけない、兎に角我々は暗い穴の中を歩いて行かう、我々はきつと明るい世界に出られるに違ひない……』と。

◆

『農人』は恐しい作品である、自分はこの作品の中で何を讀んだか、それは無限の直線に結ばれてゐる美と醜の全部である、善と惡の全部である、人間の生活を殺してゐる無智である、そして更に貧乏の恐しさである、貧しさは一切の不幸であるといふと同時に、貧しさの前には神も惡魔も自然さへも消え失せるといふ事である。チエホフは此の事を鋭く凝視し、正しく理解してゐる、そして彼は完全に表現してゐるのである。

◆

『ニコライが家に入つて家中の者を眺めた時には大きな身体や小さい身体が屋根裏部屋や、搖籃の中や、部屋の片隅に動き廻つてゐた、そして年取つた父親や女達が黒麵麭を水へ浸してがつ〳〵食つてゐる有樣を眺めた時、ニコライは病氣で、一文無しで、おまけに女房や子供を連れてこの故郷の家に歸つてきたのは過ちであつた、非常に過ちであつたと思つた』

さうだ、誰だつてさう思ふに違ひないのだ、而し我々はさう思はなければならない、その習慣的な感情の中に非常な誤謬がある事を見出さねばならない――病氣の爲めに最早働くことが出來なくなつた身を、彼は何處へ持つて行くといゝのだらう、再び都會へ歸つて行けといふのか、では彼は何うして食つて行くことが出來るだらう、結局彼は自分の生家へ歸るより外に途がなかつたのだ、而かもその生家さへ彼の歸るべき巢ではなかつた

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のだ。この非常な誤謬、我々が常に見なければならない恁うした不幸は何の爲であるか、それは貧乏である爲である、それは正しく貧乏である爲である。我々は病人に必要な澤山の病院を數へる事が出來る、その立派な病院内には、數十年來同じ事を勉强して來た博士や醫者達がゐる、數十人の（それを天職と信じて疑はない）看護婦達がゐる、而かもある多數の人々は、死に瀕してゐ乍ら、この立派な建築を眺め、それ等の醫者の打診や、看護婦達の介抱を空想丈で味はなければならないといふ事は、何うした譯だらう、それは明かにその人々は貧しいからだ、醫藥を拂ふことが出來ない程貧しいからだ、そして彼等は療るべき可能を持ち乍らバタ〳〵と死んで行くのだ、（それがこの世ではどんなに多いことだらう）彼等はそんな悲慘な運命を荷負はなければならない程、人類に不必要な人間であるだらうか、そして輕い病にも博士を呼び迎へる事の出來得る富裕な人々は、將してそれだけに人類に有用な人達であるであらうか、我々はその事をよく考へなければならない。

◈

『水の面に映つた灌木には朝露がきら〳〵と輝いてゐた、あたりは暖かくて氣持がよかつた、何といふ美しい朝だらう！どんなにしても避けやうのない、恐ろしい絶望的な貧乏でさへなかつたら、この世の生活といふものは何といふ美しい愉快なものだらう……』

さうだ、たしかに此の世は愉快なものでなければならない筈だ、若し此の人生に愉快といふのがなかつたら、生きてゐる事は全くノンセンスだ、それは此の人生に存在す可き筈のものであつて、要求す可き筈のものでない、而かるに我々は要求してゐる、不斷にそれを要求してゐる、何故要求するのか、現代には、少なくとも貧しき人々にはそれがないからだ、ないから要求するのだ、而かも我々はその要求を滿足する事が出來たであらうか、その答は無であつた、空虛であつた、そして我々の掴んだものは悲痛であり、煩悶であり、憂鬱であつた――そこで我々の心には何か新たなものが生じてこなければならなかつた、それは、現

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

5861
2144
v.1
no.1

大正十年二月二十一日印刷
大正十年二月二十五日發行

CAHIERS iDEALISTES DES JEUNES

種蒔く人

第一巻第一號

自分は農夫のなかの農夫だ。
自分の綱領は勞働である。
——ミレー——

第一號

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生活に對する[illegible]
新らしい生活の建設であつた。[illegible]
藝術を通して、[illegible]
藝術家達には、[illegible]
はその瞬に拘束されて[illegible]の人生[illegible]
す事が出來た。新たな現代の新しき[illegible]
一の自然と人生の爲めに[illegible]
ゐる。悲しい[illegible]
拒絶するに到つたのであるか。では我々は何を見る
といふのだ。何を見るといふのだ。自分の前から
れども　か、この三つに一つしか[illegible]
が出來ないのは、[illegible]の推移と言はねばならない。

（[illegible]）

編輯後記

偽りと欺瞞に充ちた現代の生活に我慢しきれなくなつて「何とかにしなければならない」といふ氣持が一つとなつて生れたのがこの雜誌です。その氣持をこゝで說明する必要がありません。讀んで下されば、よく了解されることゝ思ひます。最初の目標が少し違つてゐたので本號は程度は低いが、文章からすつと高めたいと思つてゐます。そして、この雜誌は主として

[illegible]

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

5861
2144

種蒔く人

復刻版 別冊

日本近代文学研究所

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

目次

今は昔……小牧近江……一
喜びは人とともに無限……金子洋文……ニ
回想の中から……今野賢三……四
「種蒔く人」と私……稲垣達郎……五
解説……小田切進……八
総目次……一三

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今は昔

小牧近江

「種蒔く人」全巻が四十年ぶりに翻刻されるとは全く思いもよらなかった。知らぬ間にイニシアティブをとられた小田切秀雄さん、手弁当でここまで漕ぎつけた日本近代文学研究所の若い方々に心から感謝の意を表したい。さらにこの刊行を機会に、私の現に奉職している法大講堂で、七月一日同大学社会学部学会と共催のもとに、いまは亡き盟友たち追悼の記念講演会をもって下さるとは、重ね重ね有難い次第である。

ひとくちに復刻といっても、ここに「土崎版」あり、発禁の分あり、そのほか「飛びゆく種子」、「種蒔き少年」、勇ましく（やや若気のいたりだが）おどりだした赤バンドまでありで、それらの蒐集できたのは全国にわたる古い読者たちの協力の賜物とはいえ、その労苦察するにあまりある。小田切進さんによると、リーフレット「両院議員に与ふ」は、いまもって入手困難だそうだが、それについて一言触れてみたい。

それは今日の政防法にあたる弾圧法への抗議であった。政府は大正十一年一月過激社会運動取締法を提出したが、これが後に社会運動に露骨な毒牙をあらわした治安維持法の前身、いわゆる過激法案であった。この殺人法にたいし私は直ちに「過激主義とは何か」なる一文を草したが、当時の読売新聞文芸部長柴田勝衛氏により取上げられるところとなった。（一月十九日）

「種蒔き社」は同時に議会に抗議文を送ることにきめ、平林初之輔がその執筆にあたった。山川亮と私はこの印刷物を一通一通ていねいに封筒にいれ、国会に持ち込み議員諸公に配布したが、その利き目か検束をまぬがれた。しかるに一部組合運動家たちから、「文士の火遊び」と冷笑され、「インテリ共は生命が惜しいからさ」とキメつけられた。のちに三悪法反対無産者同盟が組織され、全国労働組合同盟と提携して活動したが、そんな時代だった。

こんなことから、しまいに文学と政治が問題化してくる。行きすぎがあったにちがいない。だが、「飢えたるロシアを救え」でスタートをきり、「シベリア出兵から手をひけ」につづく文芸雑誌「種蒔く人」はその表紙にうたっているように「世界主義（インターナショナル）」を旗じるしとし、「行動と批判」を信条としているのである。では行動とはなにか？　文学運動を社会運動の一翼として、これにつらなるように仕向けること、自信をもたせる運動であった、と私は解する。その意味で「種蒔く人」は日本版「クラルテ運動」でもあ

東167799

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

った。少くも私の肚はそうだった。

文芸運動である以上、よい作品がでてきてくれねば困る。もともと文学好きな人間たちの集りだったから、無視どころではなかった。その全部といってよい無名の作家たちが、文壇というナワ張りに突入するためには、人知られぬ辛苦があった。初期プロレタリア作家と呼ばれるひとたちは、文学賞などにより、一日にしてジャーナリズムの寵児となったのではなかった。しかしその蔭の力として、わが方の陣営に最もすぐれた批評家を数えたことはめぐまれた幸運だったといえよう。

「種蒔く人」の活動期はわずか二年足らずの生命力だった。四十年前の過去を呼び起された私にとって、今は思い残ずところがない。

喜びは人とともに無限

金子洋文

第一次「種蒔く人」（土崎版）が創刊されたのは、大正十年二月で、再版（東京版）が同年十月だから、今年は丁度四十年目だ。この年に、このかゞやかしい復刻版ができたのは、社会主義文学運動史に、記念すべき金字塔をうちたてたにひとしい。よろこびは人とともに無限。おどろくべきことは、「飛び行く種子」（1号）と赤バンドの少数をのぞいて（今も探しているが）全冊がよく集ったということだ。「種」を温め保存をはかった人々の努力のたまものだ。

その一人の稲垣達郎氏は「再版『種蒔く人』細目（未定稿）」の文中で次のように言っている。

「やゝ大げさにいうと『種蒔く人』そのものは、すでに、ほとんど伝説的な存在とさえなっているといえなくもない。名ばかりがいたずらに高く、多くの人々には、その全容が少しもわかっていないのである。おくれてきた者は、二、三の先輩の言説をまったくうのみのかたちで、実物に即さない、ほがらかな意見を器用に展開せざるを得ない状態だし、さらに運動の当事者たちでさえが、ときにはおぼろげな記憶のまゝに、不確実な懐古談を行わなければならない始末となっている。これでは伝説めいても当然である」

そして実物（東京版）を詳しく紹介している。

土崎版はごらんのように、わずか十八頁の小冊だが、このはじめに「蒔かれた種」を逸しては「種」不明の「種蒔く人」になるおそれがある。しかし、四十年を経た今日ではほとんど散失して、二号と三号の各一部宛を、今野賢三が所持していたが、創刊号は残念ながらみあたらない。多くの人々は、東京震災や戦災に焼けなかった私が、全部所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

持しているが、土崎版は一冊も所持していない。そうきく度に、四十年の怠惰を責められる思いがする。復刻など夢にも思っていなかった。

ところが、一昨年秋田へかえった時、小牧の甥の近江谷喜六君が、創刊号を持っていることを発見した。そこで全三冊がそろったので、「社会主義文学」に発表して、研究者をはじめ、多くの人々の要望に応えることにした。

この反響は大きかった。そして、それまで「皆無」と思われていた「種蒔く人」終刊号「帝都震災号外」が友人の金子雄二君から与えられた。ごらんのように菊版四頁ものだが、東京震災における朝鮮人虐殺に抗議した唯一貴重な文献で、表裏を私が執筆、抗議の本文は今野賢三が書いている。

また、同じく震災当時の亀戸南葛労働者九名の虐殺に抗議した「種蒔き雑記」も、貴重な文献だが、私のもとに数冊のこっていた。

「人と思想叢書」の私が執筆した「生ける武者小路実篤」は「種蒔き出版部」の企画出版、第五巻まで予定したが第一巻で終っている。同人間の評判は甚だよろしくなかった。とくに、ツガン・バラノウスキーの言葉を引用したのを非難された。のちに知ったことだが、彼は弁証法的唯物論論争では反マルクス主義の立場であったし、ソ連革命の背反者だった。したがって同人の非難は当然だったが、こういう企画出版の場合は、委員会を設けて数度にわたって検討助言すべきであり、それをしなかった点にも落度がある。

今回読みかえして感じたことは、当時の私は、ほとんどマルクス主義を解していなかったということだ。今でもどうかと思うが、身体でも理解するところへ漸くきている。

そのため、批評の立脚点があいまいであり、とりあげる作品の選択も妥当でなかった。「ある青年の夢」「その妹」等の反戦作品に主力をそゝぐべきであったと気づいて、大いに冷汗をかいた。

さいごに、日本近代文学研究所諸氏の御努力に心から感謝し、敬意を表したい。（昭和三六年六月）

回想の中から

今野賢三

私どもにとって、この「種蒔く人」の復刻版ができることは、感動にあふれ、感謝と喜びが胸にわきあがるのです。けれども、それはただ個人的な意味より、日本の近代文化史のうえから（文学史のうえでも）また、社会主義の日本的な現実の運動のうえでの、先駆的な（文化人としての）役割を果したという再認識のうえからでもあります。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きらせて、その瞳には明日への希望を青海のように湛えていた。」と同人のことを書いています。また「創業時代、被圧迫時代、苦闘時代」と三つに分けて書いていたが、その被圧迫時代を、第一は、官権からの圧迫、第二は、既成社会と文壇からの圧迫、第三は、雑誌を発行する資金調達のうえでの圧迫、とこう書いている、そのとおりでありました。

同人たちに資金があって発行したわけではないから、発売禁止ではすぐ発行がつまづく、そこで、初校の刷ったのを内務省の図書課へ持参し、内検閲をうける、そうするとムザンに文章が削られ、消される。私など、そのために役人とはげしく言い争って一行でも一字でも多く生かそうとしてたたかったのです。そのため、「本文削除」の活字を入れ、また、印刷のとき、鉛版のその部分を削らせなければならなかった。また、白紙のままに出した、だからなにを書いたか不明となった、第六号などでも、ワクの線だけしかないが、目次に、その文章の題名があるからわかる、といったありさまで、のちには、「小牧近江」の名まで消され、ついに一頁を白紙にしたのもあります。

「飢ゑたるロシアの為めに」を叫び出したとき、雑誌として、この飢饉救済に起ちあがったのは「種蒔く人」がはじめであったし、日本の軍国主義の否定と攻撃、戦争反対と平和の叫びを、これほど、たたかれても、たたかれても、

というのは、「種蒔く人」は、発売禁止が多かったため、現存するものがほとんど無いありさまで、もしも今回、復刻されないとすれば、年月がたつにしたがってその実物がまったく失われる危険があったのです。だから、こんど明るみに実物が浮びあがることには、その努力と労苦に何と感謝してよいかわからぬのであります。

さて、復刻版を手にする人に、深く理解してもらわねばならぬ重要な点を回想しながら記しておきましょう。まず「同人」の結合、という問題だが、後年の団体のように、委員長などのようなものや、規約などの固苦しいものをつくらず、それで一糸乱れず、完全に一体となって、熱情に燃え、あたたかに結び合って行動した、ということです。私ども、小牧、洋文、の三人が、小学校時代から友人として気持がぴったりと触れ合え、少年のように抱き合う心のつながりで終始したとしても、他の同人たちとの間も、やっぱり同じであって、小牧君が、次から次へ、新しい（おどろくべき）編集の内容にかんする案をたて、それを実行にうつすにしても、それを指導者的な態度でもち出すのではなく、やわらかに人を包む、文学者的な若々しさでもち出し、また、記事についても、小牧君のはげしい主張にも、各自の意見や作品にも、同人は異議をもち出すことがなかった、ということであります。故松本淳三氏なども、後年の回想記に「小気味のいい程、いきいきと熱情をはち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さけびつづけた雑誌は、しかも文学雑誌として、歴史のうえで、ほかには無いのであります。もちろん、主として、小牧君の思想信念が、みんなをいっしょに起ちあがらせた結果だ、と言いうるのであります。次に、この雑誌のうちの、主要な位置を占めていたのは「世界欄」であったし、また「聾人」とは、ソヴィエトの日本文字であったが、発禁ごとに、資金をつくる苦労は、みんなをなおさら闘争にはげしくかりたて、ほとんど、奇蹟的といっていいくらい、金の無いのにつゞけたが、大正十一年十一月号など、原稿の内閲をうけたのに、発禁を喰わされました。大正十二年九月一日の、大地震で戒厳令が布かれたとき、在京同人がひそかに集り、その決定で休刊号を出すことになり、本文の（朝鮮人虐殺問題）の執筆を私に一任され、洋文君と二人で避難民となって秋田に走り、そうして二人の友人の印刷所でこのさいごの「帝都震災号外」ができたのです。

創刊号が発禁になったとき私はまだ秋田に居り、かえって「同人の精神の火に油をそそいだ」ものとして、小牧、洋文の竹馬の友を、「先駆者あらわる」と秋田の新聞に書いたが、もちろん、休刊までの同人が、みんな先駆的な戦いの道をいっしょに歩んだわけではあるけれども、もしも小牧君が雑誌の内容と、行動性に、文化、文学の思想面に、クラルテの運動と、マルクス主義を輝かしく持ちこみ、みちびかなかったら、これほど「高い歴史的価値」を持つことができなかったでありましょう。

「種蒔く人」と私

稲垣達郎

本郷三丁目の、東大側の、電車停留所前に、文武堂という本屋があった。小売店なのだが、室生犀星の『第二愛の詩集』などを出したりしていた。追分町の下宿にいて早稲田へ通っていたわたくしは、学校の帰りや散歩のおりに、よくこの店に寄った。

ここで、はじめて「種蒔く人」を見た。あとで名物になった赤バンドが、やはり刺激的だった。いっしょだった中野清六が、「変っとるな。ちょっとおもしろそうやな」といって買った。

中野は、膳所（ぜぜ）中学からの友達で、そろって木下尚江のものを探して歩いた仲間だが、おなじ早稲田でも、なかなか政治ずきで、明治思想史の研究を念願とし、島田三郎の憲政史か何かの特別講義を熱心にきいていた。地方政治に乗り出す気持もあったらしく、社会主義にもかなり関心をもっていた。もっとも、社会主義といえば、友達のなかで

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、毎日新聞の重役になった森正蔵が、膳所から日本中学へかわって、杉浦重剛の称好塾へ寄宿し（膳所中学の生徒たちは、いちおう、旧藩の先輩たる杉浦重剛崇拝だった）、すでに外国語学校のロシア語科にいたが、この森がいちばん熱心で、いろいろと消息に通じており、秋水・枯川訳の『共産党宣言』を、ノート数冊に写してもっていた。『共産党宣言』など、もちろん、容易に手に入れることはできなかった。

とにかく、こういう学生たちがいたころ、「種蒔く人」が出たわけだ。中野も毎号は買っていなかったようだったが、それを借りてときどき読んだ。が、わたくしには、「白樺」派や「新思潮」派や、また、歌舞伎や近松の方がよけいおもしろく、「種蒔き」は、少し荒っぽい感じだった。

「種蒔く人」がだいじであることがわかってきたのは、もうちょっとあと、プロレタリア文学運動がさかんになる少しまえだった。一冊でも多く読みたく、古雑誌屋をさがし回った。東大正門前の「柴善」には、そのころは、現在のようにかたいものばかりでなく、文芸雑誌もたくさんあったけれど、ここよりも、一高（今の農学部）の柵にそって根津の方へ曲り、権現さまの坂へかかるちょっと手前の左側にできた新店の方に見込みがあった。新店といっても、ここは、中野や、いっしょの下宿にいた、いま能や歌舞伎の批評家になっている、おなじ膳所仲間の、外語のフランス語科の北岸佑吉などと、屋号もいわず、「紙屑屋〳〵」と蔑称していた。まことに雑然とした、たしかに紙屑屋がはじめたような店だった。屋号もすっかり忘れていたところ、数年まえに、地方の古書目録で注文した雑誌に、何と、むかしなつかしい「紙屑屋」の符丁のひとつ、ウネシというのがついていた。このことを柳田泉さんにいって笑話にしたら、この「紙屑屋」が、あにはからんや宮武外骨や柳田さんやの猟場でもあったことがわかると共に、その時の柳田さんの話で、外骨らとその符丁の解読を研究した結果、屋号の「ヤネヤショウテン」の組合せだとわかったというので、その屋号も思い出した。

よこみちへそれたが、ここで少しずつ手に入れたけれども、全巻はどうしてもそろわなかった。わたくしのことだから、探すといっても気儘な話で、草の根を分けてまでもというようなエネルギーは、はじめからなくのんびりと気にしていただけなのだから、そろうはずもないのだ。それからずっとたち、早稲田大学の教員でやっていた明治文学研究会で、斉藤昌三氏から古雑誌を少しゆずってもらったなかに「種蒔く人」があった。ところが、荷造りの時にでもとりこぼしがあったとみえ、ちょっと楽しみにしていた「種蒔き」に、少し欠本があった。土崎版三冊、震災号外、「飛びゆく種子」、「種蒔き雑記」などはすべてなく、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

本誌の方にも数号の欠があった。本誌の方は、さいわい、わたくしの手持ちで埋めあわせができた。したがって、その部分だけは通読できた。「雑記」の方は、まえからもっていた。

それから戦後になる。早大の人文科学研究所から、柳田泉、京口元吉、中谷博、稲垣達郎の四人が、「政治と文学の交流」という主題で、文部省へ科学研究助成金を申請し、それが通った。その時、その研究の一部として、わたくしが「種蒔く人」の研究をすることにし、研究報告がわりに、手持ちの分だけの「細目」を作った。欠本があるのに「細目」とはおこがましく、旧同人諸氏への照会も、教示を得ることも怠り、まったくズボラなやり方で、とにかく、不完全なものでも、まず出しておけば、教えていただけようと思い、お粗末なものを活字にしてしまった。あったはずの「雑記」もまぎれこんで出て来ず、それさえブランクになった。

この「細目」をみて、ロマン＝ロランの翻訳文献が、「種蒔く人」のなかにあることを知ったロマン＝ロランの会の蜷川譲君が、そのことで小牧さんを訪ね、その時、「種蒔き」関係の諸資料を、いろいろと蜷川君にことずけて下さった。それによって、わたくしの調べをずいぶん補強することができた。それから、またしばらくして、岩波書店の「文学」の諸家連載の「日本の文芸雑誌」で「種蒔く人」を紹介することになった。それを機に、金子洋文氏からも教えていただき、今野賢三氏からも教示と「飛びゆく種子」などの資料の借覧を得た。さらに、勝本清一郎氏からも、何よりもみたかった土崎版第一号をみせていただけた。さいきんになって今野氏が秋田の方で発見され、「社会主義文学」で翻刻もしたが、それまでは、旧同人の手許にも一本もなかったのだった。「文学」では、とうとう三回連載になった。「国民之友」とか「太陽」とかの大雑誌さえ一回だったのに、これは特別なことで、わが「種蒔く人」のために、たいへんうれしかった。

中央労働学院で小牧さんの還暦祝賀会があった。その時、よんでいただいたので、そこではじめて小牧さんにお会いした。というような、何とも話にならぬ怠け者だ。研究がすすむはずもない。こんどの復刻は、復刻でも研究資料としては、何の不足もないはずだ。研究の進捗を期待してやまない。「種蒔く人」そのものについては、いま、生じっかなことをいう必要はなかろう。復刻の実物が、たいていのことは語ってくれようから。

×　×

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

解説

小田切進

『種蒔く人』は、アンリ＝バルビュスのクラルテ運動（反戦平和のためのレジスタンスのこと、労働者や農民のインターナショナルのほかに、その一翼として思想家や芸術家も国境をこえて反戦運動を展開しようとしたもの）に参加し、創設期のレーニンの第三インターナショナルの若々しい活動にもふれてフランスから帰国した小牧近江（本名・近江谷駉（こまき））を中心に金子洋文・今野賢三・山川亮・畠山松治郎（小牧の従弟）・近江谷友治（小牧の叔父）らによって、大正十（一九二一）年二月に創刊された同人雑誌である。発行部数わずか二百部といわれ、表紙とも十八頁のリーフレットにすぎなかったが、このささやかな小冊子が反戦平和・ロシア革命の擁護・すべての被抑圧階級の解放のスローガンを公然とかかげ、最も早く第三インターナショナルの紹介をおこない、ここからわが国の解放運動と芸術運動の歴史に画期的な段階をきりひらく活動を展開したのだった。

いわゆる「土崎版」（秋田県土崎港で印刷された）は、いったん三号で打ちきられ、同年十月、小牧・金子・今野・山川たちは新たに佐々木孝丸・村松正俊・柳瀬正夢・松本弘二を同人に迎え、あらためて雑誌版『種蒔く人』を創刊した。いわゆる再刊『種蒔く人』は表紙題字下にとくに「行動と批判」の文字をかかげ、表紙裏には「嘗て人間は神を造った。今人間は神を殺した。造られたものの運命は知るべきである」の言葉ではじまり、「見よ。僕たちは現代の英雄のために戦ふ。僕たちは生活の主である。生活を否定するものは遂に現代の人間でない。僕たちは生活のために革命の真理を擁護する。種蒔く人はこゝに於て起つ——世界の同志と共に！」と結ばれる宣言（村松がまとめた）を発表し、題言「思想家に訴ふ」では、ロシア飢饉の救援を呼びかけ、小牧が「革命の擁護」を強く主張しながら、山川菊栄、福田正夫、白鳥省吾、松本淳三、沼田流人（馬場孤蝶が紹介してきた）、宮島資夫らの小説・詩・評論その他をおさめ、第一次とは比較にならぬ新たな真実をそなえたものとなって現れたのである。

右の宣言とともに挙げられている「執筆家」の表には、秋田雨雀・有島武郎・馬場孤蝶・江口渙・石川三四郎・加藤一夫・宮地嘉六・百田宗治・富田砕花・吉江喬松・藤森成吉・長谷川如是閑・平林初之輔・神近市子・川路柳虹・小川未明らのほかにエドワド＝カーペンタ・アンリ＝バルビュース・ワシリイ＝エロシェンコその他の名が見られ、再刊第三号からはさらに武者小路実篤・大山郁夫・小泉鉄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らの名が加わっている。小牧によれば、これらのすべての人が執筆者となることを承諾したということであり、実際に寄稿したものが少くなかった。当時を回想して

金子　小牧が次々とプランを出すんだ。フランス流だから日本の実情に合わないプランもある。そこで村松や佐々木などが……抑えたものもある。赤バンドをまきつけるのもプランの一つだが、本屋が「うん」といわないだろうという意見だった。

小牧　「岩波」は一番先に真似たな。……マーク・レシーの「種蒔く人」が土崎版の表紙とそっくりなのも奇縁である。それから信条は「行動と批判」……。「我等」(長谷川如是閑)は「批判」。我々は行動でいこうじゃないかということだった。……一番まいったのは巻頭論文だった。どうもアナキスト系の人たちに何とかして創刊号にプロレタリアの独裁を認めることに書いて貰わなければ困るので。村松君は絶対に駄目なんだ。そこで……村松君が出したのがあの巻頭論文なんだ(「労働運動と智識階級」を指す)。……宣言を必ずつけようということを僕はいった。そこ(新橋付近のライオンというカフェー)で村松・佐々木・僕の三人が思い思いの文句を紙片に書き、その纏め方を村松君に委せようじゃないかということで、ビールを飲みながらやってのけた。

金子　だから、何度もあの宣言を読むんだが、マルクス主義でも、社会主義でもないような、あるような……いや、判らないんだ。何遍読んでも。ところが今度読んでみるといくらかボルシェビーキなんだな。この宣言と小牧の書いた「思想家に訴ふ」というのが、雑誌の性格や当時の社会主義者のあり方を示している。……(『社会主義文学』13号—昭和三六年一月、カッコ内の注は筆者)

と語られている言葉などからもうかがえるように、明治いらいの人民的文学の動向—労働文学・民衆芸術・反資本主義的文学動向のほとんどすべてのイデオローグを、執筆者としてまた公然の支持者として結集し、アンチ＝ミリタリズムとインターナショナリズムのもとに広汎な思想上・芸術上・行動上の統一戦線をつくり出そうとした小牧の意図は、「公然たる大衆運動であり、革命行動のインターナショナルである」第三インターの思想にもとづくものにほかならなかった。

創刊号(再刊)の発行部数は三千部といわれ、長谷川如是閑の紹介で同人となった柳瀬正夢が表紙及びカットを担当した。発売後ただちに、「政府の意見では全体が気にくはない」(読売新聞)という理由で発売禁止にあい、第二号はその反響も手つだって、たちまち売り切れたといわれている。しかしその号も平林初之輔の評論「現実のロシアと架空のロシア」と加藤一夫の詩「露西亜民衆に与ふ」とがともに「本文三頁全部削除」され、翌十一年一月の第四号も宣言のフランス語訳その他が理由となり発売禁止を受け、第五号からは宣言の先に引用した結びの「見よ。……ここに於て起つ」までの部分が、伏字にされたのをはじめ、以

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

後も実におびただしい伏字・削除・発禁（大正十一年一月、九月、十一月の計四号が発禁）などの圧迫を受けながら、『種蒔く人』は解放運動が当面している緊急なさまざまな諸問題をいちはやく取りあげ、『非軍国主義号』の特集（第三号）以下、『ロラン・バルビュス論争』（第十・十一合併号）、『赤色プロレット・カルト・インタナショナル研究』（第十二号）、『水平社運動』（第十六号）、『無産婦人』（第十七号）、『反軍国主義・無産青年運動』（二十号目）、『農村』（二十一号目）などの特集を次々と編み、これらの課題の追及と解決のために広汎な協力者を組織し、解放運動と芸術運動のまったく新しい関係をつくりだす活気あふれる誌面を示していった。

たとえば発禁にあうと、すぐ「題言」で反撃したほか「叩きつけられる度に僕達は躍進する、再度の発売禁止は僕達を幸した、種蒔く人は一層強くなった。僕達は雑誌ばかりで満足することが出来なくなった、愈々出版をやることに決定した、その準備として社を銀座の近くにうつした……」（第六号の編輯後記）というふうに反応し、きわめて多彩で活潑なさまざまな活動が雑誌の発行とあわせてくりひろげられているのである。

再刊とほぼ同時に種蒔き社には語学研究会と運動部が、さらに青年部が設けられ、ロシア飢饉の救援運動、巡回・文芸講演会、過激社会運動取締法案反対の運動、自由思想家組合の創立、ガンジー捕縛にたいするイギリス政府への抗議、フランス軍のルール占領への抗議、対露非干渉同盟への加盟、国際婦人デーとロシア革命記念講演会の企て……等々がおこなわれ、青山練兵場での赤色スポーツ大会などのエピソードもある。これらのエネルギッシュな活動のなかで、平林初之輔・津田光造・松本淳三・青野季吉・上野虎雄・前田河広一郎・中西伊之助・佐野袈裟美・武藤直治・山田清三郎らを新同人として加えていった。

大衆運動のあらたな昂揚のなかで、プロレタリア文学は『種蒔く人』の運動に刺戟されてしだいに活気を呈し、平林や青野の登場によって理論的にも急速に発展していったが、関東大震災（大正十二年九月）で大きな打撃をこうむらなければならなかった。『種蒔く人』をはじめ、『新興文学』や『解放』その他社会主義的な文芸雑誌はほとんど休・廃刊の運命に追いこまれた。大震災に乗じて社会主義者および解放運動への徹底的な弾圧がおこなわれ、数千名の朝鮮人が虐殺され、大杉栄や労働文学のもっともすぐれた作家の一人だった平沢計七らが虐殺されたが、ただちに『種蒔く人』はこの強権の暴虐を記録し、強い抗議をこめて『帝都震災号外』（同年十月、二百部）と『種蒔き雑記――亀戸の殉難者を哀悼するために』（大正十三年一月）を出し、天皇制批判の不朽の文字を残したのであった。これを最後に種蒔き社は解散した。こうして知識人と大衆運動との日本での最初のむすびつきを生き生きとつくりだした『種蒔

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く人』のかがやかしい歴史は終るが、ここにはその後の解放運動のすべての思想と行動の原型が示されており、今日あらためてその先駆的な意義と役割は高く評価されるべきものである。

すでに『種蒔く人』の解題としては、後の参考文献表にかかげた稲垣達郎のすぐれた報告がある。そのなかの小さな誤りは、先に挙げた『社会主義文学』の座談会で当事者によって訂正されており、ほとんど補足を加える必要のない詳細精密をきわめたすぐれた解題である。こんどの調査によって明らかになった点だけを挙げれば、『種蒔く人』の「号外」として発行された『飛びゆく種子』が、四冊ではなく、五号まで出ていることと、赤バンドが「二年有余の歴史」をもっていたらしいということ位にすぎない。

『飛びゆく種子 No. 5』は第三年第四巻第十九号（大正十二年六月号）の号外で、「国際無産子供週間を祝す」。表紙とも菊判四頁のリーフレットである。一面が種蒔き社青年部のアッピールと銀河堂の広告。二、三面が「ロシヤの小さき同志を救へ」の訴えと、救済規定。それに有島敏行の「いいおへや」、有島行三の「今晩の空」、解説「今日の問題」と『種蒔き少年』の広告である。第四面は小牧・佐々木共訳のバルビュス『クラルテ』（叢文閣）の広告、『飛びゆく種子』と『種蒔く人』バック・ナンバーの広告および奥付で、定価二銭。稲垣文の『種蒔き少年』第二号と推定されているリーフレットがこれである。

赤バンドが、どの号にまでついていたかは不明で、小牧・金子両氏の記憶では、表紙が二色刷りとなるまで（つまり第二年第二巻第九号）とのことだったが、第三年第四巻第十九号の「聳人欄」中のSM生「赤帯雑誌の発展を望む」には「赤帯も之二年有余の歴史的背景をもつ光栄を得た事……之光輝ある歴史よ実に赤帯同人の奮闘は云ふ迄もない……振へ赤帯／＼」云々の文字があるところを見ると、少くとも第三年第四巻第十七号迄はついていたものと考えなければならぬ。赤帯を廃止していれば、恐らくこの投稿は採用されなかったろうから。現在のところ、今野、金子氏らの努力にもかかわらず、創刊号—三号ほか計五号分しか発見されていない。

また『飛びゆく種子』のうち、第一号の平林初之輔・小川未明の「両院議員に与ふ」のみは未見で、この号外については小牧の回想文（この別冊所収）が詳しくふれている。

なお第二年第三巻第十四号は、二七四頁の文章が中途できれたまま以下の頁がない。この号はこんど調査した三冊とも同じで、発禁のため削除されたものと推定するほかはない。

原本の大部分は三十五斤程度の中質紙で、時に粗悪なザラ紙を用いている。復刻版は保存を考慮し、使用されたものの最上質の用紙に統一した（『種蒔き雑記』を除く）。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『種蒔く人』終刊までの内訳は次のとおりである。

第一次（いわゆる土崎版）
第一巻第一号―第三号　大正十年二月―四月　三冊
再刊　第一年第一巻第一号―第三号　大正十年十月―十二月　三冊
同　第二年第二巻第四号―第二年第三巻第十四号　大正十一年一月―十一月　十一冊
同　第三年第三巻第十五号―第三年第五巻第二号　大正十二年一月―八月　七冊
帝都震災号外　大正十二年十月一日発行
種蒔き雑記（第一冊のみ）同十三年一月二十日発行
「飛びゆく種子」一　「両院議員に与ふ」　平林初之輔・小川未明
同　二　「デクレエルの家族」レオン・トロツキー　大正十一年五月号　号外
同　三　「無名の英雄」カール・ラデック　同年七月号のかわりとして　七月二十二日発行
同　四　「ロシアを救へ!!」ナンセン博士　同年八月号　号外
同　五　「国際無産子供週間を祝す」大正十二年六月号　号外
「種蒔き少年」一　大正十二年二月号付録
付録「無産婦人諸君へ」青野季吉　大正十二年二月号付録
同「同―無産婦人の使命―」種蒔き社　同年三月号付録
同「吾等のメーデー」ゴーリキー　同年五月号付録

なおほかに種蒔き社からは「人と思想叢書」五巻の刊行が計画され、大正十一年十月一日に金子洋文の『生ける武者小路実篤』がその第一巻として刊行された。四六判百二十頁の単行本で、松本弘二装幀、定価八十銭。第二巻以降の長谷川如是閑（村松正俊）、秋田雨雀（佐々木孝丸）、山川均（平林初之輔）、小川未明（山川亮）の四冊は広告だけで刊行されなかった。

参考文献

今野賢三「黎明期に於ける日本プロレタリア文学運動」（『プロレタリア芸術教程2』昭和4年11月世界社刊）
小牧近江・佐々木孝丸・金子洋文ら「日本における社会主義文学の抬頭期を語る座談会1～3」（『人民文庫』昭和11年8月～10月）
青野季吉「『種蒔く人』の時代」（『明日』昭和23年6月）
平野　謙「『第四階級の文学』の時代」（『文学』昭和25年1月）
小牧近江「『種蒔く人』回想」（『新日本文学』昭和25年11月）
稲垣達郎「再刊『種蒔く人』細目」（『早大・人文科学研究11』昭和27年刊）
小牧近江「『種蒔く人』のころ」（『日本プロレタリア文学案内2』昭和30年9月刊に収録）
小田切進「『種蒔く人』の創刊」（『講座日本近代文学史4』昭和32年8月刊）
青野季吉『文学五十年』（筑摩書房　昭和32年刊）
稲垣達郎「種蒔く人」（『文学』昭和33年1、3、5月　三回）
金子洋文「種蒔く人」（『東大新聞』昭和36年2月8日～3月1日）
今野賢三「『種蒔く人』の運動」（『文学』昭和36年4月～）その他

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『種蒔く人』総目次

第一巻第一号（大正十年二月二十五日発行）

生存競争と相互扶助論（評論） 赤帽子 二—四
無産者と有産者（評論） 金中生 五—七
戦争に行くなら行つて見ろ —断片—（翻訳詩） マルセル・マルチネ 七
恩知らずの乞食（評論） 小牧 八—一〇
貧乏人の涙（小説） M生 一一—一五
チエホフの『農人』から㈠（紹介） 洋文 一六—一八
編輯後記 一八

第一巻第二号（大正十年三月十五日発行）

第三インターナショナルと議会政略（評論） 小牧 一—五
女工の群（詩） 洋文 五
チエホフの『農人』から㈡（紹介） 洋文 六—八
この位のことは、あたりまへだ（詩） 小牧 八
理想に生きる者（感想） 今野賢三 九—一一
歌三首 石川啄木 一
若き農夫よ（詩） ようぶん 二
貧乏人の涙（小説） 赤毛布 一二—一七
巴里より（通信） Y生 一七
断章（詩） ユージ 一七
編輯後記 一八

第一巻第三号（大正十年四月十七日発行）

第三インターナショナルへの闘争（翻訳）（ネーションより抄訳載） 金中生 二—六
私だけのこと（感想） 今野賢三 六—九
鳥屋と兵隊（詩） 小牧 九
自我主義者の手帳から（評論）—アナーキストの立場— XYZ 九—一三
チエホフの『農人』から㈢（紹介） 金子洋文 一三—一六
人生のどん底は息を引き取る（詩） 若松不知火 一六—一七
編輯後記 一八

（再刊）

第一年第一巻第一号 十月号（大正十年十月一日発行）

宣言・執筆家（一覧） 表紙裏
思想家に訴ふ（題言） 種蒔き社 一
石炭がら（小説） 山川菊栄 二—六
炎の海（詩） 福田正夫 六—九
罷業の朝（句） 山上正義 九
労働運動と智識階級（評論） 村松正俊 一〇—一九
爛れた眼（詩） 白鳥省吾 一九—二〇
刃に刺されて（詩） 松本淳三 二一—二五
三人の乞食（小説） 沼田流人 二五—三〇
比叡の雪（感想） 宮島資夫 三〇—三七
批評 三八—四八
愚論二種・菊池寛氏の立場（正俊） 三島君の小説を読む—「解放」の「寺田屋騒動と三人兄弟」（洋文） 戯曲「切支丹ころび」（弘二） 詩「少年時代の思出から」—「白樺」—（小牧） 童話集「夜明け前の歌」（孝丸）
世界欄 四九—五一
労農露国の大飢饉、赤色露国と学者、「エスペラント」か「イド」か、瑞西より（Y生）
地方欄 五二—五五
争議の跡を訪ねて（S生）、赤光会便り（M生）、古事記神話の新研究に就いて（橘井清五郎）、三四郎氏から、如是閑氏から、雨雀氏から、インテリゲンツイアの偽らざる感想—中央公論を読んで—（赤幕）
静動（雑誌紹介の記事） 五六
編輯後記 表紙四

第一年第一巻第二号 十一月号（大正十年十一月一日発行）

マキシム・ゴルキーのために（題言） 種蒔き社 扉

現実のロシアと架空のロシア（評論）　平林初之輔　六二
〈本文三頁全部削除〉
Tristitia Mundi（詩）　村松　正俊　六二—六四
北天の星（詩）　百田　宗治　六五
ロシア民衆に与ふ（詩）　加藤　一夫　六八
〈本文三頁全部削除〉
幹が私を刺した日（詩）　大藤　治郎　六八—七〇
亡き友を憶ふ（詩）　小牧　近江　七〇—七一
神様とロシア（詩）　金子　洋文　七二
〈本文一頁削除〉
飢ゑて死ぬ露西亜に（詩）　川路　柳虹　七二—七三
血の日曜日（詩）　井上　康文　七四
〈本文一頁半全部削除〉
再生の日の海を眺めて（詩）　松本　淳三　七五—七七
翼のごとく（詩）　福田　正夫　七七
酋長と噴火（童謡）　秋田　雨雀　七八—七九
村長殺し（小説）　片岡　厚　七九—八八
火を点ず（小説）　小川　未明　八九—九三
評論・西田幾多郎氏の「真美の合一点」を評す　正　俊　九四—九七
収獲の時ほか（漫画四点）　九八—九九
批評　一〇〇—一一五
評論・軍備縮小の徹底的主張（小牧）　短篇集『雨を呼ぶ樹』（二郎）　小説『好色』（弘二）　劇壇近時（洋文）　童話集『太陽と花園』（孝丸）　新作詩集『楽園の途上』（小牧）　美術・二科、院展、帝展評に代へ（正夢）　映画・民衆と映画（賢二）
世界欄　一一六—一一七
ロシアの饑饉と世界の芸術家、ブロックの死とロシアの革命詩人、エスペラント大会と階級闘争
地方欄　一一八—一二二
関門より（穴明共三）、岐阜の増水（峰人生）、一夫氏から、宗治氏から、ジュネヴより（C・R生）、片や土田杏村、片や福士幸次郎（赤幕）
静動（同人消息）　一二三
編輯後記　表紙　四

第一年第一巻第三号　十二月号
非軍国主義号（大正十年十二月一日発行）
アンチミリタリストの立場（題言）　種蒔き社　一二三
非軍国主義の論理（社論）　一二四—一二七
戦争はよくない（詩）　武者小路実篤　一二八—一二九
平和私観（評論）　吉江　孤雁　一三〇—一三三
眼（小説）　金子　洋文　一三三—一三五
コスモポリタン—童話詩—　佐々木孝丸　一三五—一三九
その夕の地平線・この若き兵隊（漫画）　柳瀬　正夢　一四〇—一四一
露西亜革命と婦人（評論）　山川　菊栄　一四二—一四三
革命家を取扱った最近の創作（評論）　藤井　真澄　一四三—一四六
保証人（小説）　吉田　金重　一四七—一五一
空を指して語る（小説）　内藤　辰雄　一五三—一六二
田園雑記（感想）　神近　市子　一六三—一六七
月（感想）　藤森　成吉　一六七—一六九
批評　一七〇—一九〇
深田康算氏の芸術観論（正俊）　長篇小説『その日暮しをする人』（弘二）　劇『玄宗と楊貴妃』　印象記『仏蘭西印象記』（小牧）　俳句『ホトトギス』（黙太）　美術『未来派』（正夢）　音楽批評の二側面（正俊）　映画「カラマゾフの兄弟」（斜塔）　菊池寛氏への公開状—『法律の轍』の跋を読んで—（涌島義博・橋浦泰雄）
世界欄　一九一—一九二
労農政府の報告・従軍者のインターナショナルと万国語・「光」出版部の株募集
地方欄　一九三—一九五
松山城から（穴明共三）・八郎湖より（利州）・地方欄に力を入れてくれ
聳人　一九六—一九九
俺は背く（詩・石渡山達）、赤いバンド号（消息・斉藤

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

善太郎、軍隊の古い町(消息・秋田雨雀)、エロシエンコを憶ふ(短歌・内野清)、浅い考へ(消息・小川未明)、人間と蜜蜂(感想・井本竜麿)、僕の立場(消息・武者小路実篤)、鎮め得ぬ胸(短歌二首・勝目てる子)、牢屋より(短歌三首・後藤謙太郎)、あゝ桜島(消息・柳良宇一郎)、ずゐぶんやられましたね(第二号削除のこと・松本淳三)、何云ってやがるんだ(詩・松村焔)、三井甲之先生のみた賀川さん—東方時論—(赤幕)。静動—(雑誌、その他の紹介)
編集後記 表紙 四

第二年第二巻第四号 新年号
(大正十一年一月一日発行)

リープクネヒトと戦争(題言) 種蒔き社 二
芸術に於ける国際主義と世界主義(社論) 三—六
現実の方へ! Im Anfang war die That(ママ)(長詩) 村松 正俊 七—一一
旅行鞄(小説) 松本 弘二 一一—二九
鉄鎖を断つ(小説) 川崎 春二 三〇—三七
『労働祭(メーデー)』前夜の曲(詩話) 鳳 逸平 三七—四四
乱舞(小説) 井東 憲 四四—四九
俺の詩三箇(詩) 石渡 山達 四九—五〇
地上にてよびかくる言葉(詩) 角園春之助 五〇—五一
プロレタリアートの歌へる(詩) 松本 淳三 五一—五二
雄阿寒おろし(小説)神近 市子 五三—六五
批評 六六—八四
美術、評家に対する笑ひ一束(正夢)長篇小説『空に指して語る』(逸年)宗教的センテイメンタリズムと偶像崇拝の時代錯誤—倉田百三氏『出家と其弟子』の上演—(孝丸)戯曲二篇、藤井真澄氏「窟を出て」—解放・谷崎潤一郎氏「愛すればこそ」—改造(孝丸)読んだもの二つの感想・『愛の翼』と『開かれる扉』(小牧)美術・岸田劉生個展評(弘二)俳論『奥の細道』評論(黙太)映画『戦争と平和』(正夢)
語り行く明の空(漫画) 柳瀬 正夢 八五
世界欄 八六—八九
ロシア饑饉と列国の干渉、農労ロシアに於けるイサドラ・ダンカン、イサドラ・ダンカンの手紙、サッコ・ヴァンツェツチ事件、マキシム・ゴーリキーとエスペラント。寄贈図書雑誌
地方欄 九〇—一〇三
社会思想の田園的浸潤としての小作人組合・故村より・仙台市のレッドムウブメント・線香の淡い煙り・湖東支部講演会
婦人欄 一〇四
音響機の音—電信局女事務員の独白
聾人 一〇五—一〇八
目撃した事件(柏木I生)、我等は何日まで盗族だ(詩・相良卯一郎)、西に東に鐘が鳴る(樋口佳一)、一夫の歌へる(詩・加藤一夫)、神戸の印象(詩・勝目てる)、真赤に燃えたその時(詩・少年局員)、「はだか娘」の歌(俗謡・栃木分監にて後藤謙太郎)、愚かなもの(詩・エス・セキソオ)、『三銃士』—ダグラスー(赤幕代)
種蒔く人を読む—新生活即新芸術 津田 先生(ママ) 一〇九—一一一
映画劇に就て 示野吉三郎 一一一—一一三
軍国主義至極結構 藤井 真澄 一一三—一一五
編輯後記 表紙 四

第二年第二巻第五号 二月号
(大正十一年二月十日発行)

発売禁止の心理(題言) 種蒔き社 一一八
三度飢ゑたるロシアのために(社論) 一一九—一二三
へんな客人(小説) 前田河広一郎 一二三—一二九
人間派と蟻の会議(童話) 金子 洋文 一二九—一三五
理草花(童話) ワシリイ・エロシエンコ 一三五—一四四
死と生と一緒(小説) 細井和喜蔵 一四四—一五三
煽動(小説) 新井 紀一 一五三—一五七
論叢

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無宗教者の宗教観　三和　一男　一五八—一六三
プロレタリアの文学　吉田　金重　一六三
相縁奇縁（赤箒）
坊主共睾丸を奪る・平おんな人生路（漫画）　柳瀬　正夢　一六四
批評　一六五—一七九
三つの社会主義雑誌を読みて（初之輔）　早く「文明から逃げ」ろ（光造）　我国文壇の光栄（逸平）　小説「俊寛」（弘二）　読んだ脚本二つ（孝丸）　美術「子供作品展」「民衆美術展」の絵について（正夢）
世界欄（第四号と同じ、ただし十四行が削除される）　一八〇—一八三
地方欄　一八四—一八七
第八師団の出動に就いて船川港のH君に答ふ（小牧生）、農村文化建設の提唱（九三生）、放浪の旅から（東北の放浪者）
婦人欄　一八八—一九〇
女性の歌（磯川潤子）婦人の解放（八木秋子）
生活・監獄生活から見た諸名士（一四人SM生）　一九一—一九八
聾　人　一九八—二〇三
悩み（詩・一労働者）、人間を知らぬ人間（詩・真島栄城）、軍人も巡査も同じ仲間（安井登志男）、二つの意味（MH生）、自然が教へる（詩・芳田誠一）、エスペラントについて（XY生）、またやりやがった（淳三）、若い力（詩・憲弘生）、どす黒い煙（詩・神田素介）、静動—
編輯後記

第二年第二巻第六号　三月号　表紙　四
（大正十三年三月一日発行）
非愛国主義者山県公観（題言）　二〇三
無産階級の芸術としての未来主義の意義（社論）　二〇四—二〇九
無日—第一—（散文詩的小説）　平戸　廉吉　二一〇—二一七
白き指よ強き瞳よ（詩）　萩原恭次郎　二一八
夜の水車（小説）　金子　洋文　二一九—二三一
初七日（小説）　松本　弘二　二三二—二四二
たたかひのうた（詩）　村中　亮　二四三—二四四
戯曲の創造性と価値（評論）　佐々木孝丸　二四六—二五〇
論叢・生きんとする本能—加藤一夫氏の「文化運動と労働運動」を読む—　渡辺　順三　二五一—二五五
批評　二五七—二七一
作と評論二三—竹内仁の「阿部次郎氏の人格主義を難ず」ほか—（初之輔）　創作「新約」に関して（正俊）　小説「父、母、妻、子」（弘二）　津田光造の小説（小牧）　十年前の戯曲集—秋田雨雀氏の『埋れた春』—（洋文）　美術朱葉会と漫画展（弘二）　再び民衆と映画に就て（賢三）
世界欄　二七二—二七四
第三インターナショナルとエスペラント問題・第三インターナショナルの勢力・ルナチャルスキーの戯曲・スペインの反動政策
地方欄　二七五—二七八
小田原の春（光造生）、軍人様の危険思想取締と危険税金流行（金沢備前生）、異端者公演を見る（久保田美偲）、放浪の旅より第二信（東北の放浪者）
婦人欄　二七九
救はれやうとして—潤子さんへ—（石野たい子）
生活　二八〇—二八一
監獄生活から見た諸名士（承前完結）
聾　人　二八二—二八五
映画界の二異端者（修三）、真理を求むる心（詩・越後谷郷花）、禁止痛快（賢三）、老いたる兄弟よ（詩・労働者）、息子のなげき（詩・KY生）、暖い慶び（詩・ケイ・アイ・セイ）、学校やめて宣伝（又二郎）、醤油屋町から（飯田生）。静動—（雑誌「壊人」その他の紹介）
編輯後記

第二年第二巻第七号　四月号　表紙　四
（大正十一年四月一日発行）
インドと日本（題言）本文削除

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反動政府へ抗議す（社論） 二八八―二九〇
土地と自由（評論） 三和 一男 二九一―二九五
青年指導者（小説） 津田 光造 二九五―三〇三
闇に生きる（小説） 松本 淳三 三〇三―三一五
その前後―ある夜のスケッチ―（小説） 鳳 逸平 三一五―三二三
弾き初め（小説） 松本 弘二 三二三―三二七
人間苦（詩） 角園春之助 三二八―三二九
反逆の刻印（詩） 矢旗 春三 三三〇―三三一
嘘（いつわり）に就いての感想（感想） 金子 洋文 三三一―三三五
文芸家懇親会―自由思想家組合の成立（記事） 三三六
種蒔き社第一回文芸講演会禁止さる（同） 三三七
論叢
吾等の要求する文芸 渡辺 順三 三三八―三四一
過激法案に対する自己の立場 今野 賢三 三四一―三四三
世界の青年に訴ふ 東京種蒔き社 三四四
批評
末弘博士の永小作権（小牧） 三四五―三五九 「武者小路氏の雑感（賢三） 新潮派の二作家（逸平） 『血に染む夕陽』小川未明（光造） 映画ジャンク活劇旋風児―千代田館上映―（賢三） 三月十三日夜の雑話―ダントン劇稽古後・ガンヂ氏逮捕を知って（赤箒）
世界欄
飢ゑたるロシアの母親より世界の母親たちに・労農承認一番槍・第二ブラックホール事件・トロツキーの創作・民衆のための美術館利用法。 三六一―三六二
地方欄
小田原より、岐阜の農村より（峰人）、台湾への逃避者―加川豊彦朝臣（備前又二郎）、製鋼所より、シベリア通信（内生）、秋田通信 三六三―三六八
婦人欄
裏面（磯川潤子） 三六九
生活 小作人の生活（天川佐吉郎） 三七〇―三七一
聳人 三七二―三七六
平和の国日本（詩・菅永十二）、その筋（登志男）、お国もこれから（羅狭仁）、哀れな散歩者（詩・芝涙花）、一つの恐怖（詩・泉風子）、男も女もない（潤子）、血潮が湧立つ（詩・芳田誠一）、赤血溢る青年達よ（詩・岡本玉穂）、強請観劇（木本竜）、静動―（雑誌その他の紹介）
編輯後記 表紙 四

第二年第二巻第八号 五月号
（大正十一年五月一日発行）

労働者と巡査（題言、カットと標題だけで空白） 三七七
メーデーと無産階級（社論） 三七八―三八〇
説明出来ざる事実（小説） 小川 未明 三八一―三八五
或る機械（小説） 細井和喜蔵 三八六―三九四
悲惨なる存在（詩） 村松 正俊 三九五―四〇一
彼の死（小説） 今野 賢三 四〇二―四一四
痩せて蒼白い顔をした夫（小説） 金子 洋文 四一五―四二〇
論叢
市中の小作組合動く ペコリンスキイ 四二一―四二四
陶器やビロードは其後―叛逆人の言葉（一）― 原田 邦三 四二四―四二五
野外劇・番犬 赤 箒 四二六
批評
帝劇の改作問題（弘二） 『第四階級の文学』に就いての感想（亮） 読んだ詩から（小牧） 『緒土に芽ぐむもの』に就いて（亮） 「処女地」の創刊（光造） 映画「心の眼」―電気館上映―（賢三） 四二七―四四〇
社会主義講座（一） 空想的社会主義と科学的社会主義 四四一―四四五
世界欄 四四六―四四九
ナンセン会見記、子供の国際的教育、「新神聖同盟」の活躍、無政府主義者の抗議。
地方欄 四五〇―四五二
秋田通信（平一郎）、名古屋から（荻野幽青）、新しい敵の戦術（窪田木実）
婦人欄
凡てに反く（港けい子） 四五三―四五四

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生活欄
三等局員の日記（赤河運堂）、婦人運動者の近眼（細井和喜蔵）、銀座にて（淳公） 四五五—四五七
聳人欄 四五八—四六一
労働祭—少年少女対話（無署名）、講演会の中止について（鈴賢）、ダントンとタドン（無署名）、懊ましき外景（河村久雄）、蒔く人蒔けぬ人（蒼さめた東北の労働者）、空想の空想（詩・美録石）、我等の敵は人間だ（詩・清水一々生）、不安心な国土（SH）、主義者を作る人々（秋山武男）。
編輯後記 表紙 四
号外・「飛びゆく種子」第二号

第二年第二巻第九号 六月号（大正十一年六月一日発行）
メーデーの教訓（題言） 四六三
芸術運動に於ける共同戦線（社論） 四六四—四六六
文芸運動と労働運動（評論） 平林初之輔 四六七—四六九
癈兵を乗せた赤電車（小説） 金子 洋文 四六九—四七三
恐怖の片影（童話詩） 佐々木孝丸 四七三—四七五
帰村せる署長（小説） 飯田徳太郎 四七五—四八六
路傍の男（小説） 今野 賢三 四八六—四九三
ブルジョア文芸の不倒子を突倒す（評論） 津田 光造 四九三—四九七
アテイストの独考（宗教論） 佐々木孝丸 四九七—五〇一
シベリア通信—「赤衛軍の非礼」と「反日本民衆運動」、極東建国記念祝賀会 五〇二—五〇三
論叢
「未明」管見 亮平 老史 五〇四—五〇八
大阪と神戸の講演会—自分だけの感想 金子 洋文 五〇九—五一〇
批評 五一一—五二〇
青年将校の観たる西伯利出征軍の実状（小牧）、平林氏『最後の幻覚』—文化主義者に与ふ—（日之樹）、武林氏の近作二篇（弘二）、大関柊郎氏作『嵐』を評す（弘二）、映画黙示録の四騎士—浅草帝国館（小牧・洋文・淳三）
世界欄 五二一—五二四
罪の償ひ・支那を見習へ！第三回教員組合全露大会・労農露国の科学界現状・某家秘蔵美術品入札・国際的道具集の週間
地方欄 五二五—五二七
足尾のメーデー（羅手九）、異端座主備「種蒔く人」同人文芸講演会を観て（無署名）、鉈をとぐ（詩・川口生）、館林より（長脇差）
聳人 五二八—五三三
新苗売節（しんないうりぶし）（売文社）、首がころがる（中西伊之助）、酒場（詩・芝涙花）、大木曾の辺より（硬骨生）、メーデーの歌（詩・藤田浪人）、放浪者の幻想（詩・飯田徳太郎）、赤い町（新まゝ書）、異大な力（詩・MY生）、花見（詩・鈴俊道）、おゝ△△、〇〇（袴田生）、車掌さん（詩・鈴俊道）、立憲国の恩典（KO生）、労働者の墓はない（詩・新島栄治）。
社会主義講座（二） 五三三—五三七
エスペラント講座 別丁三—四
編輯後記 表紙 四
号外「飛びゆく種子」第三号（七月号のかわりに）

第二年第三巻第十・十一号 八月特別号（ロラン・バルビュス論争）（大正十一年八月一日発行）
自由主義の段階（題言） 一
世界平和・人類愛・撤兵と飢饉（社論）
露国飢饉救済金募集 二—四
ロマン・ロオラン対アンリ・バルビュスの論争 五—三六
ロオラン・バルビュスの肖像と自署
Ⅰバルビュス—『ロオランデイスムに就いて』〈クラルテ・第二号〉
Ⅱロオラン—〈自由芸術・一月号〉
Ⅲバルビュス—〈クラルテ・第六号〉
Ⅳロオラン—〈自由芸術及レセニヤ・インテルナツイヨナーレ・三月号〉
Ⅴバルビュス—〈クラルテ・十月号〉
牛に牽かれて（詩） 穴明 共三 三七
シベリア通信 三八—四〇
労農政府の「新政策」に就いて（重平生）、片山潜氏の日本政局観。
論叢 四一—四四

ごろつき食倒し論―平林君に一言― 中西伊之助
中西氏に答ふ 平林初之輔
批評 四五―六六
猶太人と世界革命（小牧）、「実感」主義者林癸未夫君（日野樹）、新進戯曲作家総評㈠（洋文・孝丸）、才人佐野袈裟美君の小説（三郎生）、人道主義の芸術と悪魔の芸術―再び有島武郎、谷崎潤一郎両氏の芸術を評す―（光造）、唯一の女流作家―『村の反逆者』を読む―（洋文）、地平社と四十年社（弘二）、映画『人生の行路』―金春館上映―（賢三）
世界欄 六七―六九
飢ゑたるロシアの救済と虚構記事、エス・エル党四十七偽士の裁判、赤色スポート・インターナショナル、純粋プロレタリアの戯曲―革命詩人マルセル・マルチネの四幕物『夜』―。
地方欄 七〇―七一
復活した秋田（TK生）、松江だより、ロシア飢饉のため秋田の青年奮起す。
聳人 七二―七七
薬品工場から（M生）、焔（詩・高橋純二）、青十字とは？（田治郎）、吾々の生活（生駒雷遊）、本屋へ十二度通ふ（K生）、たつた八十円の生命（MY生）、或る少女へ（和田信義）、ペコ君の記事から（うつろぎ生）、自由何処に存在する（詩・鹿島篤）、こぼされた種（X生）、階級意識に眼覚めよ（萩野幽香）、プロの叫び（寺田路郎）、静動―（雑誌紹介）
社会主義講座㈢ 古代の社会主義 七八―八二
編集後記 表紙 四
号外「飛びゆく種」第四号

第二年第三巻第十二号 九月号
（赤色プロレットカルト インタナショナル研究）（大正十一年九月一日発行）
革命運動と反革命運動（題言） 九三―
無産階級文化と美的要求（社論） 九四―九七
プロレタリアの進行曲 H 生 九九―一〇〇
プロレットカルト・インタナショナルの意義（H 生） 一〇〇―一〇三
ロシヤの社会教育 レーニン夫人 一〇三―一〇三
独逸に於けるプロレットカルト運動 O 生 一〇四―一〇五
労働階級教育の革命的意義 青野 季吉 一〇五―一〇九
死体の発掘（小説） 麻久 生 一一〇―一一五
シベリア通信 一一六―一一七
批評 一一八―一二七
無産階級運動の方向転換（小牧）、『生活の火』小川未明著（光造）、ヨネ・ノグチの天井（弘二）、『少年教化』といふこと―子供雑誌の傾向と内容―（孝丸）、詩人の合葬（淳三）、第一作家同盟讃意（弘二）
貧乏暇あり（戯文） 赤帶 一二八
世界欄 エス・エル党員の罪状 一二九―一三一
地方欄 一三一―一三五
曾我廼家以上（牛田沢麿）、秋田に於けるロシア飢饉救済運動（寺延衛夫）、二十世紀の奴隷（野本正雄）。
聳人 一三六―一四四
無産階級ないないづくし―貧乏詩人淳三に与ふ―（詩・光造）、第一に蹴飛ばせ（岡本潤）、糊米判任官（詩・銀杏生）、心から（うつろぎ生）、菊池寛の火花（頑鉄投）、種蒔く人を見て（詩・石川黎明花）、妖怪の出現（徳永砂夫）、犬でさへ尾を振る（真殿真二）、六月号を読んで（鈴賢）、自業自得のくるしみ!?（詩・美緑石）、プロの手帳より（M生）、馬鹿ツ、井筐節三（片岡芽雄）、テロの夢（詩・高橋純二）ほか一編。
エスペラント講座 別丁五―六
編輯後記 表紙 四

第二年第三巻第十三号 十月号
同人創刊号（大正十一年十月一日発行）
一週年（題言） 一四五
夜（戯曲一節） マルセル・マルチネ 一四六―一四九
眼（小説） 山川 亮 一五〇―一五六
遺産（小説） 津田 光造 一五七―一六二
屍に咲く（戯曲） 上野 虎雄 一六三―一七五
美学者の恋（詩） 村松 正俊 一七六
血痕（小説） 松本 淳三 一七七―一八一
おい！仲間（小説） 今野 賢三 一八二―一八四
暴風雨（小説） 松本 弘二 一八五―一九一
世界欄 一九二―一九三
エス・エル党公判に対するルナチャルスキイの論告―

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

革命期に於けるプチブルジョアの役割
地方欄 一九四―一九六
秋田市に方ける新人の叫び（T生）、能代の文芸講演会（石岡生）。
聳人 一九七―一九九
隣室の肺患者（詩・勝手二四郎）、自由の天地よ（詩・深谷赤人）、イヒヒ節（詩・黒田蓮太郎）、タンカラめぐり（詩・MY生）、私は燃へてゐる（詩・AK子）、ブルジョアの種蒔き社（中島弘二）、改税（KY生）、莫迦なプロジョアー（SM生）。
秋田青年思想研究会の創立（記事） 二〇〇
社会主義講座―十八世紀に於ける社会主義（モレリー） 二〇一―二〇七
アインスタインよりバルビュスへ（手紙） 二〇七
編輯後記 表紙 四

第二年第三巻第十四号 十一月号
（大正十一年十一月一日発行）
現実革命と芸術家（題言） 二〇九
・写真 ラデック、ゴルキー 二一〇
昨日と今日 マキシム・ゴルキイ 二一一―二一三
奴隷の判逆 〃 二一三―二一六
レーニン論 〃 山川菊栄訳 二一六―二二三
ボルシェヴィスト動く 〃 二二三―二二五
レーニンの実験 〃 二二五―二二七
知識階級と無識者との闘争
社会革命党裁判に就いてアナトル・フランスへ 〃 二二七―二二九
アレキシス・イヴーノギッチ・リーコフへ 〃 二二九―二三〇
アナトル・フランスの来露を促す 二三〇
ジノヴイエフ、フロサアル 二三〇―二三一
マキシムゴルキイとロシア革命 カアル・ラデック 二三一―二三五
女詩人（詩） 村松 正俊 二三六
敵を呪ふ詩（詩） 松本 淳三 二三六
赤列車
五九郎の代数（武林無想）、「傍人主義者」（青野季吉） 二三七―二四〇
批評 二四一―二五二
「労農ロシア承認問題の批判」の批判（初之輔）、芸術の遊戯化に就いて（賢三）、柳瀬正夢君の漫画（小牧）、擡頭期にある農民芸術に就いて（淳三）、二科と院展（正夢）
シベリア通信 二五三―二五五
地方欄 二五八―二六三
全国のサラリーマン団結せよ―此書を特に青春の血に燃ゆる若き男女の薄給者諸君に捧ぐ―（松木秋風）、異端座第九回試演（巻之介）、頑迷の瞳を捨てよ（梅野草二）、極東無産社を設立して入社歓迎す（赤岩光弥）、余の軍備撤廃論（赤岩光弥）、国粋会と警察（東野菊郎）
聳人 二六四―二六八
十月号読後（松木秋風）、其の日、獄囚（詩・細田林蔵）、悪魔たれ（うつろぎ生）、ソビエット（詩・K生）、的ケ浜（詩・井ノ川良太）、血のやうな火は燃ゆる（短歌・信友会員高畑得二）、無題（詩・KO生）。
社会主義講座㈢十八世紀に於ける社会主義
ジャン・ジャック・ルッソオ 二六九―二七四
編輯後記 表紙 四

第三年第三巻第十五号 新年号
（大正十二年一月一日発行）
リーブクネヒトの戦争観（題言） 一
赭土に芽ぐむもの〈ある四人の夢〉―表現座上演脚本 中西伊之助作 金子洋文脚色 二―一四
ソレルの回想（解説） 植田好太郎 一四―一七
赤列車 一八―二四
科学と無産階級（評論、武藤直治）、ある日の夢（感想、水守亀之助）、鼠―A Sketch―（小品、前田河広一郎）
批評 三五―四九
無産階級の教育的独立（M・N）、『自由人の生活意識』加藤一夫著（光造）、決闘を読んで（賢三）、浅草と百姓の生活―『国境の夜』を読んで―（洋文）、前田河広一郎氏の『三等船客』（淳三）、小林徳三郎氏個展評（弘二）、プロレタリアの少年少女雑誌のために（小牧）、我が現

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

代の子供雑誌を見てどう思ふか（三枝）、
『一房の葡萄』（玉井）、ジュンサ（チンパ
チロー）、ポオルクロオデル氏の講演に
就いて（小牧）
世界欄　五〇—五一
赤色スポート・インターナショナルの第三インターナ
ショナル参加、世界語とロシア、エスペラント大会
聾人　五二—五七
日本のモスコーより（鹿島生）、猫の眼（黒谷百苦）、
同志はふえて行く（深谷赤人）、芸術家の群（詩・魅鬼
魔津）、感謝と不満—不満は麻生久様へ—（中山武夫）、
ひっぱられて行く彼の後姿を（詩・A子）、僕達は戦か
ふ（進藤和助生）、少将様の講演（幽汀）、百姓と大砲
（SH生）、ロシアの会（胎盤社）、婦人雑誌を撲殺せよ
（M生）、風楼にみつ（A生）、犬小屋と火事（土崎加賀
町人）、変る世の中（佐久間生）
ア博士に回答を求む（記事）　五七
社会主義講座㈣十八世紀に於ける社会主義—
—マブリとサンシモン—　五八—六四
編輯後記　表紙　四

第三年第四巻第十六号　二月号
水平社運動（大正十二年二月一日発行）
人間権の奪還（題言）（高橋貞樹）　六五
水平社運動の経過（社論）　六六—六八
水平社とは！（解説）青十字凡人　六八—七八
或る夜のこと（感想）平野　小剣　七八—八二
水平社訪問記（感想）佐野　学　八三—八七
蒸し返しの過激法案　八八
飢えたるロシアの児童を救へ（記）　八九—九一

赤列車
黒煙（感想、中西伊之助）、電車に乗った　七二—一〇一
夢の中で思った事（感想、細井和喜蔵）、
虚無主義者と生の執着—或る呆気者の手
記から—（感想、一氏義良）、唯物論と神
秘主義（評論、武藤直治）
西伯利亜の一隅より（報告、感想）
ヨシフウラジシルロフ　一〇二—一〇五
批評　一〇六—一二四
無産階級運動のABC（小牧）、啓明会運
動—「文化運動」新年号—（日野樹）、来
るべき白兵戦の前に（淳三）、『脱船以後』
其他（亮）、名刀の斬味—旧劇に対する感
想—（洋文）、有島武郎氏の『酒狂』（賢
三）、階級闘争と芸術運動（季吉）、プロ
レタリア作家の自家撞著（光造）
世界欄　労農ロシアの謝状・ロシア救済新計画　一二五—一二六
聾人　一二七—一三三
戦（詩・信田星宵）、戮力（詩・同人）、無題・戦（詩
・同人）、貴重の紙面（白馬生）、資本主義を倒せ（詩
・無名生）、入営（詩・幸田生）、祝聾人欄（小牧生）、
初夢の猪（省二生）、吹雪の中より（岩田要吉）。
編輯後記　表紙　四
附録　無産婦人版『無産婦人諸君へ』青野生
附録　「種蒔く人」少年版『種蒔き少年』一号

第三年第四巻第十七号　三月号
無産婦人号（大正十二年三月一日発行）
国際婦人デー（題言）　一四三
プロレタリアと婦人問題（評論）
山川　菊栄　一四四—一四九
国際共産婦人デーのこと（解説）
岩坂　幸子　一四九—一五三
国際婦人デーのために—思ひ出づるままに
—（時論）　井出　とし　一五三—一五四
現代社会と婦人（評論）林　てる　一五四—一五八
女工生活の断片（報告）
浪内やま子　一五八—一六一
女工と淫売婦に就いて（感想）
細井和喜蔵　一六二—一六四
鐘紡の配当と女工（報道）　一六四
無産婦人と水平革命（評論）
高橋　貞樹　一六五—一七一
露独革命と婦人の解放（評論）
クララ・ツエトキン　一七二—一七五
両性問題と社会主義（研究）
守田　有秋　一七六—一八七
共産党と無産婦人—第三インタナショナル
の今年度の婦人活動—（評論）　一八八—一九五
ロシアの小さき同志を救へ　一九六—一九八
巴里コムミュンとその教へ（解説）
青野　季吉　一九九—二〇一
赤列車　二〇二—二〇九
純粋なれ、而して彼等を記憶せよ（感想、
小川未明）、鐘（感想、海野栄）、通俗芸

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

術家出でよ（評論、藤井真澄）
宣言・決議 過激社会運動取締法案反対無産者同盟 二一〇—二一一
批評
本営戦と外営戦（季吉）、北昤吉氏の「独乙国民性」観（日乃樹）、野村吉哉の詩（亮）、「劇芸術」創刊号（孝丸）、稲富喜太夫（小牧）、赤き子供等（小牧）、再び無産児童教育の独立（N・M）、内辰閣下へ（啓蒙生）、福士先生の『挑戦』（弘二）、ロシヤの教育—「社会主義研究」を読みて—（初之輔） 二一一—二二九
世界欄 二三〇—二三二
第三インターナショナル第四大会に於ける共産婦人運動報告、イサドラ・ダンカンの言葉。
ヨッフェ氏小伝 二三二
聾人 二三二—二三六
村のお正月（深谷赤人）、残秋暮（詩・松田庄吉）、混凝土（詩・松田庄吉）、お姫様よ（詩・A子）、出頭を命ぜられた日（詩・赤岩光弥）、プロレタリアンの心よふざけるな（詩・梅野草二）、圧迫の支配（詩・イスエス生）、ゆきの日（安岡黒村）。
創作
火事の夜まで（小説） 今野賢三 二三七—二四九
編輯後記 表紙 四
附録 「共産婦人諸君へ」（二度目）
第三年第四巻第十八号 五月号
（大正十二年四月十五日発行）
分裂と統整（題言） 二五一
K村行きの記—センチメンタルな男—〈未定稿〉（小説） 山川 亮 二五三—二六四
遁走（小説） 松本 弘二 二六四—二七四
『世界語』比較小論（一）（研究） 佐々木孝丸 二七五—二八一
労農婦人の印象（感想） 鈴木茂三郎 二八一—二八五
平林初之輔氏に—「ごろつき論」に関して— 尾崎 士郎 二八五—二八七
尾崎氏に答へる 平林初之輔 二八七—二八九
赤列車 二九〇—二九七
桃色の兵隊—京城所観—（中西伊之助）、ブランキズム（解説、佐野袈裟美）、車中漫語—赤列車の隅で—（感想、田所照明）
解散された「国際婦人デー」 二九八—二九九
ロシアの小さき同志を救へ 三〇〇—三〇一
批評欄 三〇二—三一〇
倫理的義務は？（季吉）、『彼等の行く方へ』小川未明著（小牧）、床次前内相に代って林君を難ず（日乃樹）、無産青年とデカダン文芸—尾崎士郎・松本淳三の徒に与ふ—（光造）、怒れる「文化」（小牧）、Young Communist の『地獄』評（不知火）、要求条件一つ（亮）、「地獄」評（光造）、内部的整理の必要（弘二）、金子の「地獄」（弘二）、第三者として—読売紙
掲載菊池寛の一文—（賢三）、「火事の夜まで」の作者へ（鷹谷信行）
世界欄 三一一—三一四
プロレットカルト問題と其実際方面、プロレットカルト・インタナショナル中央執行部員写真、モスコー・プロレットカルト絵画研究所生徒作品。
聾人欄 三一五—三二〇
文壇ゴマの蠅征伐（第二）—文芸春秋座—（沐猴冠者）、民衆の道徳は生きることだ（詩・安岡黒村）、俺らの天国へ（詩・田中猶人）、婦人解放演説会（秋山武男）、吹雪の国より（詩・堀江彦蔵）、窓（詩・月下人）、絶叫—今野賢三兄に—（葭塚不二男）、自主（詩・場倉順吉）、闘士に（同上）、大旋風の中を！（詩・赤き火生）
編輯後記 表紙 四
附録 「吾等のメーデー」（ゴーリキー）
第三年第四巻第十九号 六月号
（大正十二年六月一日発行）
青年とルール（題言） 三二三
頭脳労働者と組合運動 山川 均 三二四—三二八
安倍能成氏の平和論（遺稿） 小口小静〈筆名・吉田梅子〉 三二八—三四六
母への書（遺稿） 三宅 信 三四六—三四八
暴力（小品） 前田河広一郎 三四九—三五一
裂片（感想） 藤森 成吉 三五一—三五二
文化主義と新宗教主義（評論） 武藤 直治 三五二—三五五
『クラルテ』序文 小牧近江、佐々木孝丸 三五六—三五七

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ロシアの小さき同志を救へ　三五八—三五九
青年部の成立他記事　三六〇
批評欄
愚劣なる空論を排す！（光造）、『恋と牢獄』（亮）、アナとボルの争ひ（光造）、読書後（小牧）、『地獄から帰って来た少年の話』金子洋文著（小牧）、話が違ふ—ブルジョア少年団へ—（寸見生）、大衆の創造性（青野）、文芸への逃避（袈裟美）、創作、翻訳、詩（青野）　三六一—三七四
世界欄　三七五—三七七
全世界の労働青年諸君へ！（共産主義青年インターナショナル執行委員会）、僧正死刑、「ロシア共和国民衆芸術家」、モスコー文芸週報発刊、モスコーのクリスマス、万国労働者ロシア救済会大会。
聳人欄　三七八—三八四
猥談破裂—続文壇ゴマの蝿征伐—（沐猴冠者）、印焼（詩・岩田敏郎）、僕は特殊部民の一人である（栃木優倍）、老いたるものの為に（詩・A子）、赤い子供から（かく子）、赤帯雑誌の発展を望む（SM生）熱火（詩・岩尾赤爛）、祖国なきもの（詩・鹿島篤）、正義の絶叫（詩・深谷赤人）、「白色の恐怖」がなんだ！（詩・S・さとる）
創作
酒（小説）　金子　洋文　三八五—四〇〇
無名の英雄（小説）　若松不知火　四〇〇—四〇七
編輯後記　表紙　四
号外「飛びゆく種子」五号

第三年第五巻第一号　七月号（大正十二年七月一日発行）
資本主義と軍国主義（反軍国主義無産青年運動）　平林初之輔　二—四
無産青年運動の使命　青野　季吉　四—一二
午前十時その他　金子　洋文　一三—一六
新しき芸術青年に檄す（評論）　今野　賢三　一六—一九
苦闘の三氏へ（未明・雨雀・吉蔵三氏へ）
藤森成吉、井東憲、吉田金重、岡本潤、津村京村、山内房吉、新井紀一、堺利彦、生田長江、福田正夫、片岡厚、萩原恭次郎、千葉亀雄、水守亀之助、新居格、神近市子、白鳥省吾、吉江喬松、尾崎士郎、細井和喜蔵、加藤一夫ほか　二〇—二七
メーデー印象記（感想）　前田河広一郎　二八—三三
ブルジョアカルトの組織と本質（評論）　赤根　葭男　三四—三九
大地の匂ひ　小牧　近江　四二—四三
宮島の月夜　李　太　四三—四四
円鳥会第一回展覧会（美術評）　松本　弘二　四四—四六
井汲清治氏の名論　海野　栄　四七—五〇
握り合った手の力だ（詩）　陀田　勘助　五〇—五一
世界欄　ロシア共産党とバルビュス　五二—五三
聳人欄　五四—五八
血と火の洗礼（詩・田中猥人）、出勤前（詩・K生）、病苦と借金（詩・赤大根）、期待はこれ！（詩・冷忍生）、くたばっちまへ！（詩・場倉順吉）、虐げられし
青年よ（詩・鹿島篤）「クラルテ」の会二つ（記事）
戯曲・雪を踏んで（一幕）　佐野袈裟美　六〇—七一
編輯後記　七二

第三年第五巻第二号　八月号（大正十二年八月一日発行）
農村
農村苦（題言）　七三
農民の社会的立場　平林初之輔　七四—七六
お百姓あひて（感想）前田河広一郎　七六—八〇
農民と小作組合　山川　均　八一—八三
農民芸術の考察—『農夫喜兵衛の死』　今野　賢三　八三—八六
公園で遭った百姓（感想）　金子　洋文　八七—八九
議会と農業問題（評論）海野　栄　八九—九一
農村青年と語る（感想）香里英夫　九二—九九
農村と思想家（感想）山田清三郎　九九
高尾平兵衛君のこと（記事・追悼記）　一〇〇—一〇三
スペインの出来事—先駆者の死　ボーレル　一〇四—一〇五
斬頭台の冬（漫画）柳瀬　正夢　一〇六
雑感　青野　季吉　一〇七—一〇九
雑読メモ　M・K・T　一〇九—一一三
井東君の『地獄の出来事』　佐野袈裟美　一一三—一一四
鎖　小牧　近江　一一四—一一六
ある感想「仮想者の恋」を読む

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

過去（史談）　山川　亮　一一六―一一八
故有島武郎氏肖像―昨年八月秋田にて　氷乃樹六郎　一一九―一二〇
吊辞ママ　種蒔き社　一二一
故き有島先生と自分　今野賢三　一二三―一二六
最後の印象　小牧近江　一二六―一二七
有島さんのこと　佐々木孝丸　一二七―一二八
『三人の会』の報告　前田河　一二九―一三〇
『二ツの魂』　不知火　一三一―一三三
世界欄　一三四―一三八
革命労働者国際会議、ルールとロシア労働者、第三インタナショナル倍大会委員会、ロシア児童からの手紙、赤色スポーツインターナショナル。
聾人欄　一三九―一四三
「地獄の会」（失名氏）、田園詩人一束（関根尊）、詩二章（鈴木熊）、火は燃える（詩・田村耕二）、小曲（詩・生田美和）
獄を出て―A兄へ―（感想）（中西伊之助）　一四四―一四六
編輯後記（A）　一四七

帝都震災号外（大正十二年十月一日発行）
購読者に与ふ　一
休刊に就て　種蒔く人の立場　二―三
同人消息　四

種蒔き雑記　第一冊
亀戸の殉難者を哀悼するために
（大正十三年一月二十日発行）
日本の労働者農民及び青年学生諸君に檄す
共産主義インターナショナル執行委員会（モスコー）　五
カット　フランツ・マズレエル　七
平沢君の靴（八島京一氏の供述による）　九―一一
三日間の平沢君の行動（正岡高一氏の供述から）　一一―一三
騎兵第十三聯隊の紙片―川合義虎君の死とお母さん（河合たま氏の供述から）　一四―一八
拘引されるまでの川合君の行動（川崎甚一氏の供述から）　一八―一九
おとなしい鈴木直一さん（河合たま氏の供述から）　二〇
鮮人へ同情して―山岸、近藤両君の追懐―（佐々木節氏の供述から）　二一―二三
北島君と蜂須賀刑事（主として庵沢義夫氏の供述から）　二三―二五
夫の残して行った賃金―加藤高寿君の妻女と二刑事―（妻女たみさんの供述から）　二六―二九
拘引されるまでの加藤君の行動（同）　二九
骨―吉村光治君の実兄と森亀戸署長―（南喜一氏の供述より）　三〇―三三
鮮人とあやまられて―殺された佐藤欣治君―（南喜一、南巌両氏の供述から）　三三―三四
地獄の亀戸署（藤沼栄四郎氏、立花春吉氏の供述より）　三五―三九
編輯後記（K生）　四一

後記　現代史の上に大きく深い区切れを刻みつけることになっている反政防法の闘いのさなかに十年宿願だった『種蒔く人』復刻版を完成できてうれしい思いである。反政防法の闘いがそこに出発点をもつ歴史的な安保闘争がわれわれにあたえたもっとも重要な教訓は民族と民主主義の問題の人民の立場からする再評価ということであったとおもう。私たちが今度多くの困難を承知でこの復刻に踏み切ったのも、『種蒔く人』が今から四十年も前にはじめてほかならぬこれらの問題を敏感にとりあげ、その科学的な解決の方向を明快にしめした運動であったからである。私たちの今日の再評価の仕事はこの『種蒔く人』の検討を含むような包括的でこまやかなものでなければならぬのではないかと思う。こんど復刻するにあたり、『飛びゆく種子』一号のほか、赤帯が数点がどうしても見つからなかった。これはなお探究をつづけているので、発見次第翻刻し、補充するつもりである。間接読者の場合は復刻版ナンバー、住所、氏名を研究所宛通信されたい。　西田　勝

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA